

吹屋恵久保遺跡

渋川警察署吹屋交番新築事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書



渋川警察署吹屋交番新築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

一〇一

2021

群馬県警察本部
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

吹屋恵久保遺跡

渋川警察署吹屋交番新築事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2021

群馬県警察本部
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

序

渋川市の北半に位置する子持地区(旧子持村)は、小野子山塊の東端で、子持山の南麓にいだかれて、東を利根川、南は吾妻川で挟まれた限られた地勢の範囲に位置しています。それでも利根川と吾妻川の合流地点という地理的な特性から、歴史的にも交通路や軍事上の拠点として重要視されてきました。近年では基軸道路交通網の整備として、南北に走る国道17号から吾妻川左岸に沿った国道353号を結ぶ鯉沢バイパスが開通したことにより、子持地区には新たな開発の波が訪れています。この大きく変容する地域の安心・安全に対応するため、吹屋地内に警察交番が新設されることになりました。これは地名から「吹屋交番」と命名され、令和3年2月に開所しました。

吹屋交番の建設地は、以前よりよく知られた埋蔵文化財包蔵地の一部で、吹屋恵久保遺跡と名付けられています。そのため、交番建物の建設工事に先立って、令和2年7月に事前の発掘調査が実施されました。発掘調査では、この地域特有の榛名山噴火による火山灰や軽石が厚く降り積もっていて、その下に埋もれていた古墳時代の墳丘墓が発見されました。

発掘調査の成果は、詳細な実測図や写真記録等として後世に残すことになりますが、本報告書では記録類の掲載とともに、その歴史的意義についても言及しています。発掘調査で判明した古代人たちが残した痕跡は、地域史の流れを裏づける重要な証拠でもあります。このことから鑑みて、本報告書が今後の地域史研究の一助となることを大いに願うものであります。

最後に、本報告書の上梓にあたり、発掘調査と報告書作成業務に多大なご理解とご協力を賜った群馬県警察、渋川市教育委員会、地域住民の方々に衷心より御礼申し上げて序といたします。

令和3年7月

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
理 事 長 向 田 忠 正

例　　言

- 1 本書は、渋川警察署吹屋交番新築事業に伴う埋蔵文化財の記録保存として、令和2年度に発掘調査が実施された吹屋恵久保(ふきやいくぼ)遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 遺跡の所在地は、群馬県渋川市吹屋660-67である。
- 3 発掘調査の面積は、165.0m²である。
- 4 事業主体 群馬県警察本部
- 5 調査主体 公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 6 発掘調査の期間と体制は次のとおりである。
　調査 令和2年7月1日～令和2年7月31日
　(履行 令和2年6月1日～令和2年9月30日)
　発掘担当者・遺構写真撮影 専門調査役 間庭 稔
　遺跡掘削工事請負 株式会社飯塚組
　地上測量委託 アコン測量設計株式会社
　土器洗浄注記委託 社会福祉法人ゆずりは会
- 7 整理作業の期間と体制は以下のとおりである。
　整理 令和3年4月1日～令和3年5月31日
　(履行 令和3年4月1日～令和3年7月31日)
　整理担当者 専門調査役 大木紳一郎
　遺物写真撮影 (土器)専門調査役 大木紳一郎／(石器)専門調査役 岩崎泰一／(鉄器)専門員 板垣泰之
　遺物保存処理 専門員 板垣泰之
- 8 本書作成の担当者は以下のとおりである。
　編集 専門調査役 大木紳一郎
　デジタル編集 主任調査研究員・資料統括 齊田智彦
　執筆 (本文・土師器観察表) 専門調査役 大木紳一郎
　(縄文土器観察表) 主任調査研究員・資料統括 橋本 淳
　(石器観察表) 専門調査役 岩崎泰一
　(鉄器) 専門員 板垣泰之
　(テフラ分析) 株式会社火山灰考古学研究所 早田 勉
- 9 出土石器の石材同定は、飯島静男氏(群馬県地質研究会会員)に依頼した。
- 10 発掘調査記録及び出土遺物は群馬県埋蔵文化財調査センターに保管してある。
- 11 発掘調査及び報告書作成に関して、以下の方々にご協力を頂いた。ここに記して感謝に替えます。
(敬称略)群馬県警察本部、渋川警察署、渋川市教育委員会、石井克己、早田 勉

凡　例

- 本文中に使用した座標・方位はすべて国家座標「世界測地系(測地成果2011)／平面直角座標第IX系」である。挿図中北方位マークは座標北であり、真北偏向角は-0° 08' 54.71"である。
- 遺構の検出位置については、m単位による座標値(X軸値、Y軸値)で示してある。また挿図中の断面基準高と高等線の数値は標高(m)を示す。
- 挿図の縮尺は数字標記か縮尺スケールで示した。遺構図は1/100、遺物図では石器と鉄器を除く土器を1/3の縮尺で図示してある。また、写真図版の縮尺は挿図と同率で掲載してある。
- 挿図及び遺物観察表に掲げた遺物番号は、整理作業において付番したもので、遺物取上げ番号(注記番号)とは異なる。
- 地形図(第6図)は国土地理院地形図1:25000「伊香保」(平成24年9月1日)「金井」(平成21年5月1日)「鯉沢」(平成21年6月1日)「渋川」(平成14年10月1日)、渋川都市計画図1:2500(平成26年)を使用した。
- 本文及び挿図中におけるテフラの記載に以下の略称を用いることがある。

「As-B」浅間板鼻褐色軽石群

「As-Sr」浅間白糸軽石

「As-YP」浅間板鼻黄色軽石

「As-C」浅間C 軽石

「Hr-FA」榛名二ツ岳渋川テフラ

「Hr-FP」榛名二ツ岳伊香保テフラ

「As-B」浅間B 軽石

目 次

序	
例言	
凡例	
第1章 調査に至る経過	1
1 調査の原因	1
2 調査の経過	1
第2章 調査の方法	2
1 調査の手順	2
2 記録の方法	4
3 基本層序	4
第3章 周辺の地形と歴史的環境	5
1 周辺の地形	5
2 火山災害の影響	5
3 周辺遺跡の概要	7
第4章 検出された遺構と遺物	11
1 遺構の概要	11
(1) 調査1面	11
(2) 調査2面	11
(3) 調査3面	11
(4) 調査4面	15
(5) 調査5面	15
(6) 調査6面	20
2 出土遺物	21
3 遺物観察表	25
第5章 総 括	28
1 方形周溝墓について	28
2 古墳時代前期土器について	28
3 周辺遺跡との関係について	30
付 編 吹屋恵久保遺跡のテフラ分析について	31

写真図版

抄録

挿図目次

第1図	発掘調査地点の位置	2
第2図	発掘調査地点と隣接道路の遺構分布	3
第3図	基本層序(1~40)	4
第4図	遺跡附近地盤区分図	6
第5図	遺跡の位置と様名ニッケル鉱物テフラの分布	6
第6図	周辺遺跡分布図	8
第7図	調査2面(Hr-FP下面)平面図	12
第8図	調査3面(Hr-FA下面)平面図	13
第9図	方形周溝渠上面の土層断面図	14
第10図	調査4面(埴丘盛上面)平面図	16
第11図	調査5面(埴丘構築面)平面図	17
第12図	方形周溝渠埴丘断面図	18
第13図	調査6面(埴丘下旧表上面)平面図	19
第14図	上器集中出土地点	20
第15図	出土遺物(1)縄文土器	21
第16図	出土遺物(2)石器	21
第17図	出土遺物(3)土師器	22
第18図	出土遺物(4)土師器	23
第19図	出土遺物(5)土師器	24
第20図	出土遺物(6)鉄器	24
第21図	方形周溝渠の推定復元図	29
第22図	斜格子文焼の類例	30
第23図	上層柱状図	33
図版	テフラ分析試料	34

表 目 次

第1表	周辺跡路一覧	9
第2表	テフラ検出分析結果	33

写真目次

Pl. 1	吹屋久保遺跡調査区遠景(NW→)
2	調査面の状況(SW→)
3	表土剥離状況
4	調査1面(Hr-FP上面)遺構確認作業
5	調査1面全貌(E→)
6	調査2面(Hr-FP下面)全貌(S→)
7	Hr-FP直下面で判明した方形埴丘(NE→)
8	Hr-FP直下面に残る多数の馬蹄痕(NE→)
9	馬蹄痕の確認作業
10	埴丘北側斜面に残る馬蹄痕
11	馬蹄痕検出状況(左は前脚部分)
12	柳形くぼみに堆積するHr-FP
PL. 4	調査3面(Hr-FA下面)FA最下層のSiを薄く残した状態
13	馬蹄痕群と思われる踏み検出状況
14	馬蹄痕と推定される跡跡
15	馬蹄痕と推定される跡跡
16	馬蹄痕と推定される跡跡
17	Hr-FA断面 下からSi, Sr, So
PL. 5	調査4面(埴丘盛上面)全貌(NE→)
18	埴丘盛上面の検出作業(NE→)
PL. 6	埴丘中央の盛上断面(E→)
21	埴丘中央付近の盛上層Aセクション西半(SE→)
22	埴丘中央上層断面Dセクション
23	埴丘中央の盛上断面Dセクション(W→)南へ傾斜
24	北辺中段の盛上断面Bセクション北半(SW→)
25	東辺埴堀断面Aセクション東部(SE→)
26	東辺周溝渠堆積上層断面Aセクション東端(S→)
27	調査5面(埴丘構築面)全貌(NE→)
28	埴丘北辺の中段テラス部(W→)
29	埴丘北辺西半のテラス部(N→)
30	埴丘東辺の溝状テラス部(N→)
31	埴丘北辺テラス部の盛上(W→)
PL. 8	調査6面(埴丘下面)全貌(E→)
33	埴丘中央盛上下的上器集中出土層位(W→)
34	埴丘中央盛上下的上器集中出土状態(E→)
35	旧地表土中鉢(025)出土状況
36	1号・2号上坑検出状況(W→)
PL. 9	出土遺物(1)縄文土器・石器
PL. 10	出土遺物(2)土師器
PL. 11	出土遺物(3)土師器・鉄器

第1章 調査に至る経過

1 調査の原因

旧渋川市域の北辺を流れる吾妻川の北岸に沿う国道353号は、渋川市内においては中之条・草津方面へ向かう交通路として主要な役割を担っている。従来は国道17号と国道353号の鯉沢交差点での渋滞解消が課題であったが、両国道を結ぶ鯉沢バイパスの全線開通(2008年)によって大幅に改善されることとなった。現在ではバイパス沿線に大型商業施設の建設が続き、以前では考えられなかつた活氣のある地域づくりが進められている。群馬県警察では、これに伴う治安情勢の新たな変化に対応するべく、渋川警察署管内の北牧駐在所と上白井駐在所を統廃合し、国道353号鯉沢バイパスに沿った地点に吹屋交番を新設することとした。新交番の業務開始とする令和3年2月にあわせて、交番の建設工事が計画され、この地点が「吹屋恵久保遺跡」として周囲の埋蔵文化財に含まれることから、群馬県警察と群馬県地域創生部文化財保護課(以下「県文化財保護課」と呼称)の間で発掘調査についての手続きが進められることとなった。

吹屋交番建設予定地は給食センターの跡地であり、地下の遺存状況が危ぶまれたが、県文化財保護課による試掘・確認調査の結果、建物基礎となった部分を除いて榛名山噴火の降下テフラに覆われた古墳時代の遺構面の存在が判明した。この結果を受けて、工事に先立つ埋蔵文化財の発掘調査の必要性から群馬県警察と県文化財保護課との間で協議が行われ、面積154m²を対象とする発掘調査が実施されることとなった。

県文化財保護課の調整により、吹屋交番建設予定地の埋蔵文化財発掘調査は公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が受託することとなり、群馬県警察本部長と公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団理事長との間で令和2年6月1日付けの受委託契約が締結された。契約の履行期間は、令和2年6月1日から令和2年9月30日とし、発掘調査期間は令和2年7月1日から同月31日までとした。なお、当初契約後に一部の調査面積追加に関する協議が行われ、契約変更により最終的な調査面積は

165m²となった。

2 調査の経過

調査担当者記載の「調査日誌」に基づき、以下に日誌抄として記す。

- 7月1日 挖削重機による表土掘削開始。
- 7月3日 調査1面(Hr-FP上面)での遺構確認と、平面測量及び写真撮影。人力による軽石層(Hr-FP)の除去開始。
- 7月7日 厚い軽石層(Hr-FP)の除去のため、一部で掘削重機による削除。方形周溝墓の北東隅を確認。
- 7月10日 方形周溝墓の墳丘形状が判明。墳丘上に残る調査2面(Hr-FP下面)の精査のため、電動プロアによる軽石除去作業。多量の馬蹄痕を検出。
- 7月13日 調査2面の写真撮影、平面測量。一部で調査3面を覆う火山灰(Hr-FA)の除去開始。
- 7月15日 調査3面の検出作業。馬蹄痕や建物跡と推定される痕跡の検出。
- 7月16日 調査3面(Hr-FA下面)の写真撮影、平面測量。墳丘上面にHr-FA降下前の馬蹄痕を残す箇所を検出。
- 7月17日 調査4面(墳丘面)の精査。盛上面を検出。調査4面の平面測量。
- 7月20日 調査4面の方形周溝墓全景写真撮影。中段にローム混土で築成したテラス部分を検出。
- 7月21日 ローム混土による盛土層を除去。方形周溝墓基盤面を調査5面として、中段テラス部分の精査。やや硬化したテラス面から、「作業跡」と想定。調査5面の写真撮影、平面測量。
- 7月22日 方形周溝墓墳丘盛土の断面調査。
- 7月27日 墳丘盛土の全面除去。方形周溝墓構築前の旧表土面の調査。古墳時代前期を主とする土器群が出土。墳丘下中央付近で集中出土箇所が判明。火山灰考古学研究所(早田氏)による土壤サンプル採取。
- 7月28日 旧地表面の写真撮影、平面測量。遺物取上げ。
- 7月29日 発掘調査終了。埋め戻し開始。
- 7月30日 現況復帰。調査事務所撤去。
- 7月31日 発見届提出。

第2章 調査の方法

1. 調査の手順

発掘調査の調査面積が165m²と小規模であったため、対象範囲の全面掘削による遺構検出を行った。また、調査面については、北側に隣接する中郷恵久保遺跡での調査成果及び年代的鍵層である榛名山二ツ岳のテフラに基づいて、以下のように設定した。

調査1面—Hr-FP上面。6世紀後半以降の遺構確認。

調査2面—Hr-FP下面。6世紀中葉の地表面、及び6世紀前半の遺構確認。

調査3面—Hr-FA下面。6世紀初の地表面、及び5世紀後半代の遺構確認。

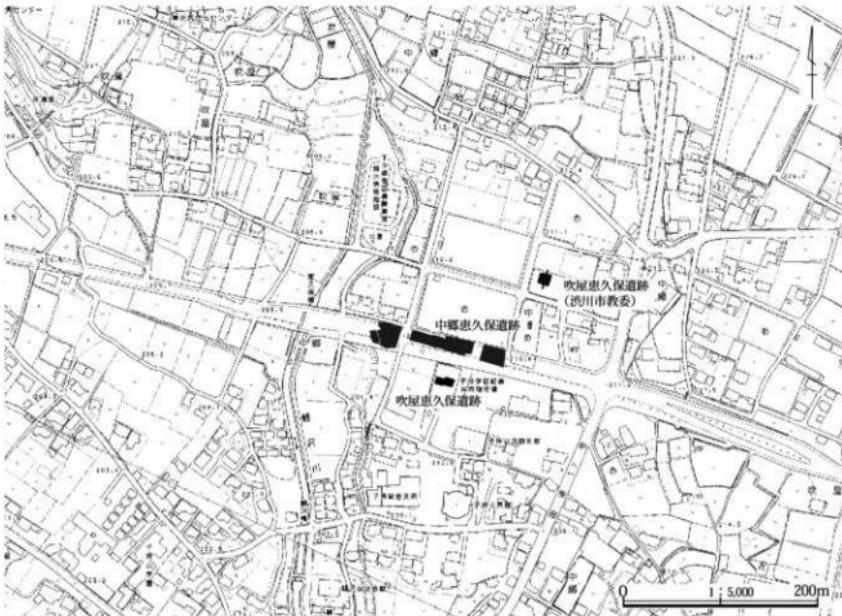
調査4面—墳丘盛土上面。

調査5面—墳丘掘削構築面。

調査6面—墳丘下黒褐色土層。古墳時代前期以前の遺構確認。

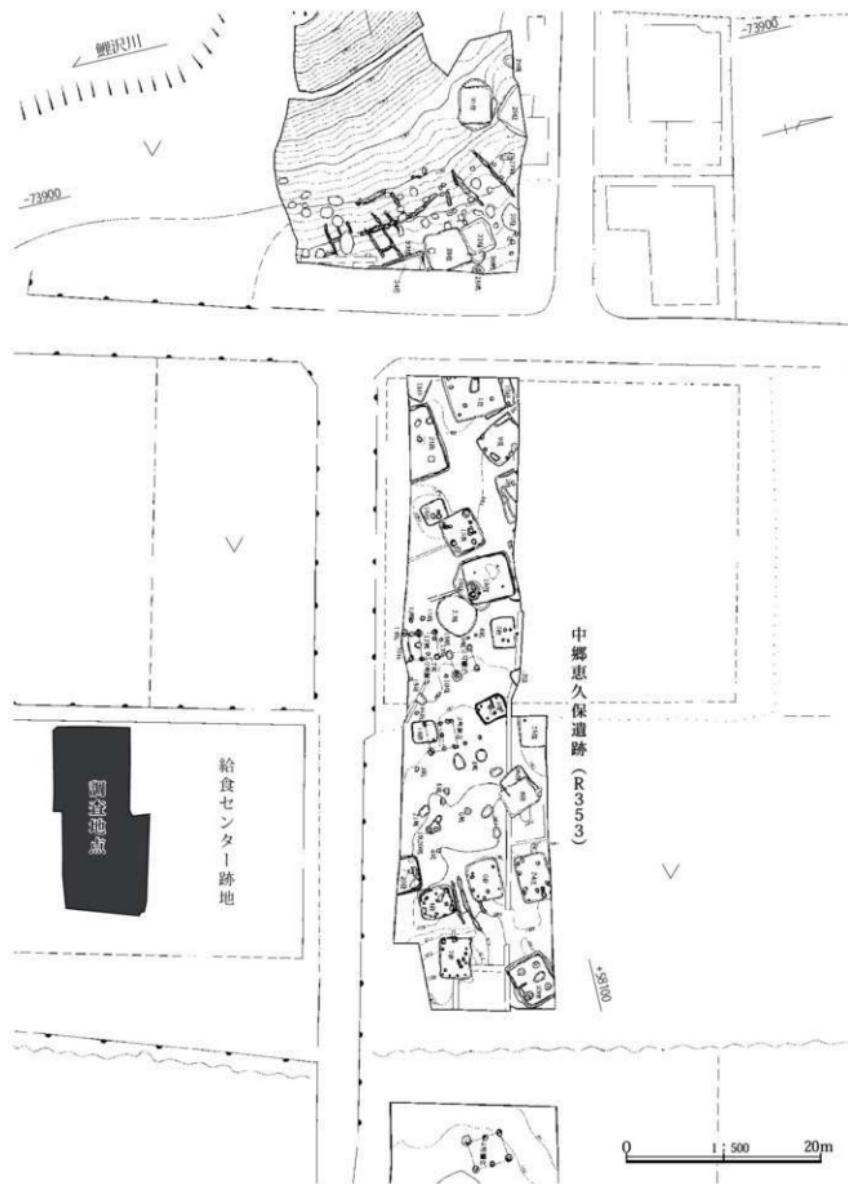
なお、調査4・5面は方形周溝墓墳丘の盛土層が確認された結果、その全容を把握するために平面調査として追加したものである。

榛名山北東～東地域では、榛名山の噴火により6世紀初頭の榛名二ツ岳渋川テフラ(Hr-FA)と、6世紀中葉の榛名二ツ岳伊香保テフラ(Hr-FP)が厚く堆積しており、これに覆われた当時の地表面には、田畠や路面、足跡などの通常の発掘調査では確認困難な痕跡が残されている。また、渋川市の黒井峯遺跡(旧子持村)や中筋遺跡の調査以来、テフラ層内に残された立体物の痕跡も重要な調査対象となっている。「甲を着た古墳人」の発見で話題を呼んだ渋川市金井東裏遺跡では、Hr-FAのなかでもSa



第1図 発掘調査地点の位置(渋川市都市計画図47・48 平成26年版より作成)

1. 調査の手順



第2図 発掘調査地点と隣接遺跡の遺構分布(群理文2006「中郷恵久保遺跡」掲載図より作成)

と呼ぶ火碎流で落命したと考えられたことから、10数回に及ぶ噴火イベントのどの段階での痕跡なのかをHr-FA層中で探る方法が続けられている。このため、遺跡に堆積するHr-FAのユニットメンバーがS₁～S₁₃のどれに相当するかの認定が必要になる。これについては、渋川市教育委員会と火山灰考古学研究所の早田勉氏に協力願うこととなった。

本遺跡の北側に25m離れて中郷恵久保遺跡が位置する(第1・2図)。当該遺跡では古墳時代前期の竪穴建物を主体とする集落址が判明しており、縄文時代の遺構や出土遺物もみられる(群埋文2006『中郷恵久保遺跡』)。吹屋恵久保遺跡は、この中郷恵久保遺跡と同一の遺構が分布すると想定されたため、黒褐色土層中の調査面での遺構確認が期待された。

2. 記録の方法

各調査面での平面図測量と全景写真撮影を行った。平面測量には世界測地系(測量成果2011)に基づく基準点により、座標上に位置づけている。検出された主要な遺構が盛土墳丘を有する方形周溝墓であったことから、主軸方向とその直交軸に沿った土層断面を設定し、土層堆積状況の測量を行った。また出土遺物のうち、二次的移動の可能性が少ないと考えられたものについては、取上げ番号を付して、座標値と水準値を計測したうえで取り上げた。

なお、調査地が狭小なため任意のグリッド設定は行わず、平面位置はすべて座標値で示すこととした。

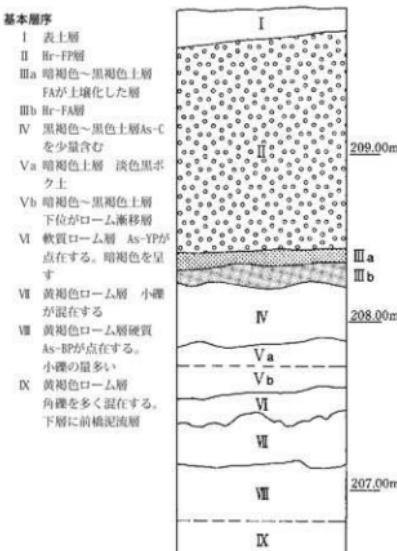
出土遺物の出土位置を示す注記は、遺跡名の「吹屋恵久保(ふきやいくぼ)」を「H1」、「方形周溝墓墳丘盛土」を「H2」とアルファベット表記に略した。

3. 基本層序

本遺跡では調査区内の各所が建物基礎で遺存しておらず、また良好な遺存部分は検出された方形周溝墓の埋土・盛土となっている。このため、遺構が存在せず後世の擾乱を受けていないプライマリーな土層堆積の見られる箇所がない。土層対比のための基準層序としては、可能な限り後世の影響が少ないことが望ましいので、ここでは北側隣接地点の中郷恵久保遺跡の層序を掲げることとした(第3図)。本来的に同一遺跡と考えられ、層序や層厚

に大きな相違がないと判断したことがその理由である。

遺跡周辺の基本層序は、表土層以下、棟名二ツ岳伊香保テフラ(Hr-FP)、棟名二ツ岳渋川テフラ(Hr-FA)、黒褐色土、ローム漸移層、ローム層の順で堆積している。後述するように、当地域は6世紀中葉に噴出降下した棟名二ツ岳伊香保テフラ(Hr-FP)の降下分布軸の中央付近にある。Hr-FPは角閃石安山岩質の白色輕石が大部分で、経年による土壤化は見られず、降下堆積時の状態を保ったまま地表下に堆積している。群馬県の平野部や谷地形では、天仁元(1108)年の浅間山噴火による浅間Bテフラ(As-B)が通常みられるが、本遺跡周辺ではほとんど確認できない。第3図に示したように、Hr-FPの直上に表土層が直接堆積するのは、後世におけるHr-FP上層以上の削平、客土によると考えられよう。中郷恵久保遺跡でのHr-FP層厚は1.3m前後だが、北方に1kmほど離れた高台に位置する黒井峯遺跡では2mに達する地点もみられた。Hr-FP層下には暗~黒褐色土が8cm前後、その下位には5~15cmの厚さでHr-FAが堆積する。暗~黒褐色土は土壤化したHr-FAと考えられ、植物の腐蝕分解した有機質分が含まれることが多い。Hr-FAの下位に堆積する



第3図 基本層序(群埋文2006『中郷東久保遺跡』より引用)

黒褐色土は、3世紀後半代～末の浅間Cテフラ(As-C)が混在する。As-C一次堆積層は、群馬県中～西部の谷地形や溝の堆積物中に見られることがあるが、平坦な地形では降下後の人為的耕作等で攪拌された土壤中にAs-Cが含まれることが多い。この場合は、As-C降下以後の堆積物と認定され、群馬県内では古墳時代前期～中期(Hr-FA降

下以前)の表土層と想定できる。黒褐色土層の下位にはローム漸移層が堆積し、弥生～绳文時代遺構の確認面と設定している。ローム層には、上からAs-YP、As-Srが含まれ、標高207m付近ではAs-BPと小礫が含まれる。その下位には角礫の多いローム層をはさんで前橋泥流堆積物がみられる。

第3章 周辺の地形と歴史的環境

1 周辺の地形

旧子持村地域の集落や田畠が主に営まれるのは、子持山南麓と利根川および吾妻川に画された段丘地形である。段丘形成は利根川と吾妻川の側刻・堆積作用によると考えられ、遺跡周辺では上位から沼田盆地の河岸段丘と同段階と考えられる雙林寺面、長坂面、白井面、浅田面と命名された河岸段丘面がみられる。近年では遺跡発掘調査成果を取り込んだ地形区分の再検討が行われ(吉田2013)、約5万年前に形成されていたとされる長坂面のうえに約2万4千年前の前橋泥流が乗り上げて堆積、あるいは旧地表面の削剥といった作用で西伊熊面・恵久保面・上白井面の小規模段丘面が形成されたと考えられるようになった。低位の白井面・浅田面は各々Ⅰ・Ⅱ面に、また現河床に面した最低位は新たに河原面として細分されている(吉田2013)。

吹屋恵久保遺跡の立地する恵久保面は、前橋泥流上に板鼻褐色軽石層(BP)以上のローム層をのせており、標高220～210mの南西に傾く緩斜面で、遺跡地北～東側の長坂面とは10m前後の比高がある。ちなみに、長坂面より高位で最古段階の形成とされる雙林寺面には黒井峯遺跡が立地しており、本遺跡立地地点とは十数mの比高がある。

段丘地形を画する河川との関係では、南西に一段低い白井Ⅱ面を介して吾妻川が南東に流下する。本遺跡からこの吾妻川左岸までは、最短直線距離で550m離れる。本遺跡付近と吾妻川との比高は37mほどで、河岸は垂直に切り立った崖になっている場所が多い。段丘地形の東側を蛇行する利根川とは最短でも960mほど離れており、間に一段高い長坂面が展開していて、遺跡地からは利根

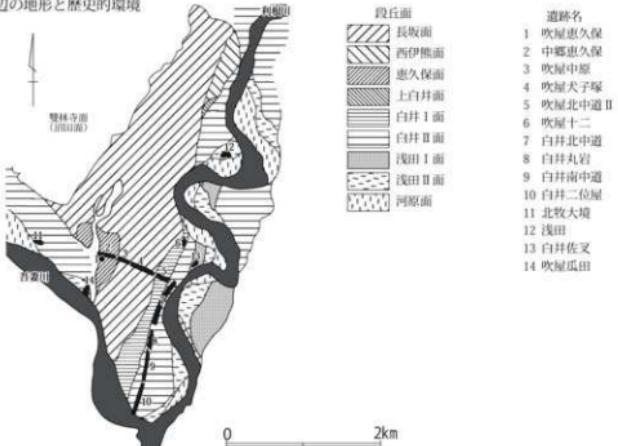
川を直接望むことはできない。

遺跡の北側約1.7km離れて、高位段丘である雙林寺面の背後に子持山の山麓地形が迫っている。この山麓地形を形成したのは、数十万年前まで噴火を繰り返していた際の火山噴出物・泥流堆積物である。

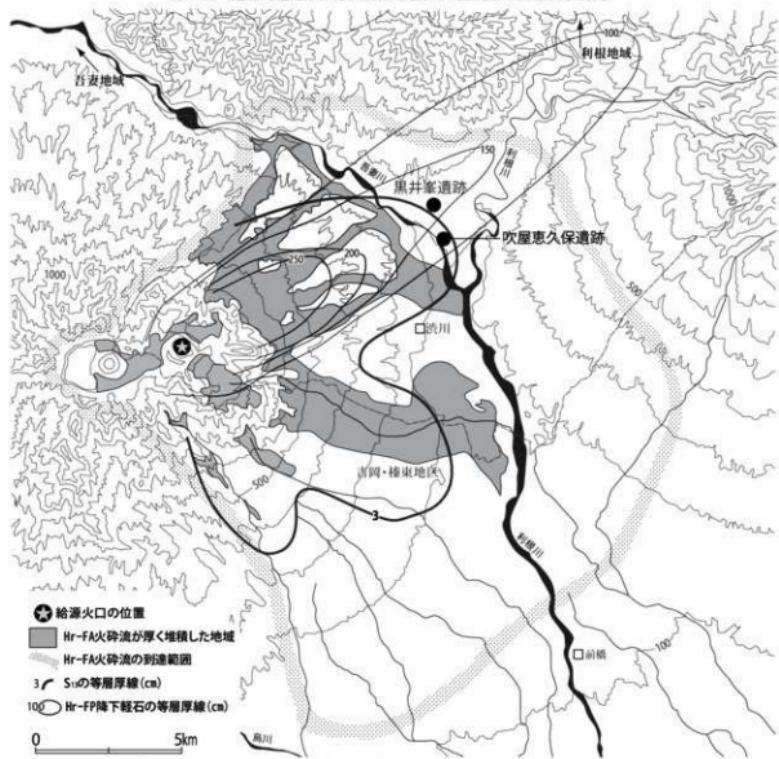
遺跡立地や範囲との関係では、遺跡の西方150mほどを南流する鯉沢川が注目される。長坂面を下刻する小河川であるが、遺跡の西側では高さ1mを超える侵食崖が形成されている。中郷恵久保遺跡の調査結果では、鯉沢川左岸の法面上端で古墳時代前期集落分布が終結しており(第2図)、少なくとも古墳時代前期までには谷地形が形成されていたと考えられる。また遺跡の東側150mほどで小規模な浅谷地形が確認されている。現在は国道17号に沿って小規模な水路が残されているのみだが、時期は不明だが鯉沢川と同様な小河川の侵食地形と考えられるよう。

2 火山災害の影響

吹屋恵久保遺跡の存する旧子持村域は、赤城山・子持山・榛名山といった火山に囲まれており、とりわけ6世紀代の2回に及ぶ榛名山の大噴火は、地域形成史に著しい影響を与えた。榛名山の二ツ岳付近を火口とする噴火活動のうち、6世紀初頭前後には東麓地域の広範囲に多量の火山灰を降らせ、また大規模な火碎流が発生して、その災禍は利根川対岸の赤城山西麓にまで及んだ(第5図)。次の6世紀前葉の大噴火では、多量の軽石が噴出降下し、その主軸が火口から北東方向だったために、旧子持村のほぼ全域が厚さ1～2mの軽石で埋もれてしまつた(第5図)。当地域では、この榛名山噴火によって壊滅、あるいは埋没した遺跡が多く残されている。一方



第4図 遺跡周辺地形区分図(吉田英嗣2013論文第2図を加除転載)



第5図 遺跡の位置と榛名二ツ岳給源テフラの分布

(群埋文2021『金井下新田遺跡《古墳時代以降編》』の第8図・第9図を合成作図)

では、6世紀後半～7世紀にかけて顕現化する地域再興の事実も遺跡の様相や分布から知ることができる。

3 周辺遺跡の概要

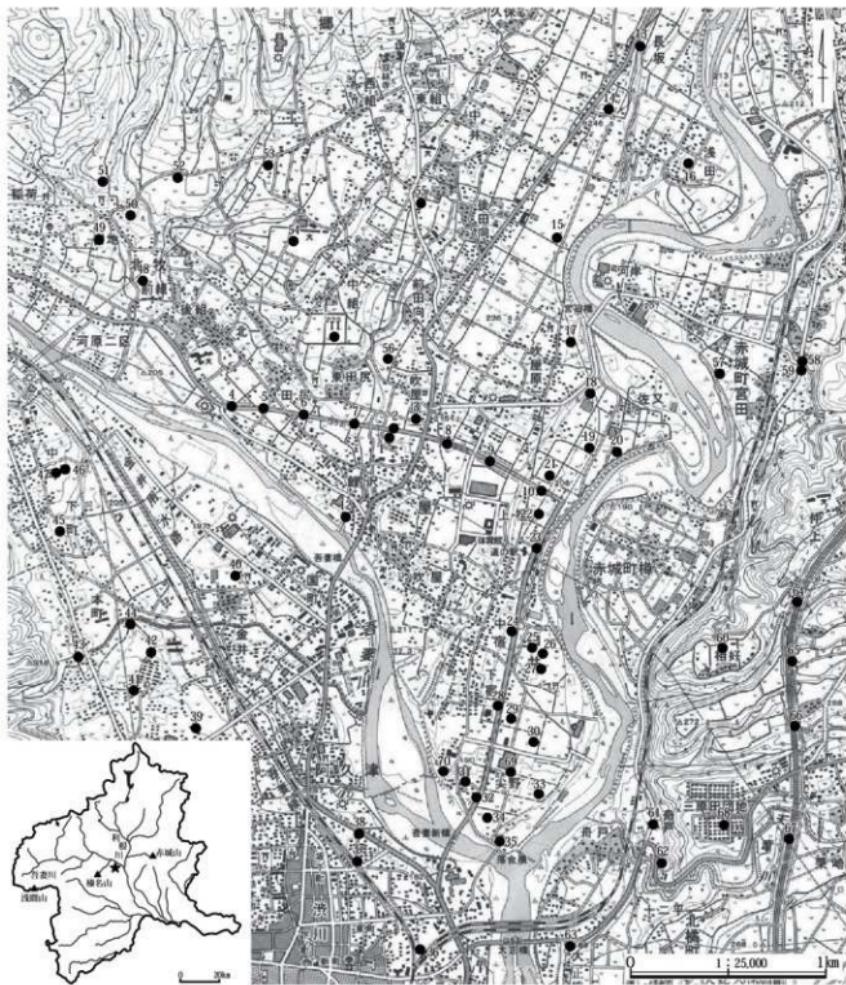
吹屋恵久保遺跡の周辺に分布する各遺跡については、本遺跡と時期的に関連する古墳時代を主として第1表に掲げたので参考にされたい。

旧石器時代については、瀬戸内海技術による国府型ナイフ製作跡が判明した上白井西伊熊遺跡(13)のほか、中郷遺跡(14)・吹屋遺跡(15)・吹屋犬子塚遺跡(9)・吹屋中原遺跡(8)・白井二位屋遺跡(32)など河岸段丘長坂面での発見例が目立つ。利根川対岸の赤城山西麓でも、見立溜井遺跡(64)・諏訪西遺跡(65)・中畦遺跡(66)・房谷戸遺跡(67)など閑却自動車道が嶺断する丘陵部で連綿と確認されている。

縄文時代では、草創期から晩期まで間断なく分布している。草創期では中郷田尻遺跡(6)・吹屋三角遺跡(7)・白井北中道遺跡(23)・白井十二遺跡(18)が知られており、最古レベルの隆起線文土器段階から活動の場として認められる。縄文集落の存在が判明するのは前期前葉からで、遺跡数も増加し分布を広げる。続く中期では大規模集落も形成される。中郷遺跡(14)・吹屋中原遺跡(8)が好例で、利根川対岸には大規模環状集落の代表例である三原田遺跡(68)や房谷戸遺跡(67)が知られる。後期では遺跡数が減少するが、本遺跡の西側に隣接して水場遺構が検出された吹屋三角遺跡(7)が知られる。子持山麓南端に位置する押手遺跡(52)では、縄文後～晩期の石棺墓群と配石遺構、さらにこれに続く弥生時代前期の再葬墓が確認されている。同じ弥生時代前期では、吾妻川右岸の南大塚遺跡(渋川市)も知られる。弥生時代前～中期では、少数の土器等が出土する小規模遺跡がみられるのみであったが、近年の調査で、吾妻川を挟んだ南西対岸にある金井東裏遺跡(46)・金井下新田遺跡(45)から、中期中葉の豊富な土器群の存在が判明した。これらは再葬墓に用いられたと考えられ、不鮮明だった当地域の中期弥生社会を再評価する契機が与えられた。群馬県域における中期後葉は、水田農耕集落遺跡の低地進出で特徴づけられるが、当地域では稀薄でいま明確な姿を見せていない。渋川市域南部に位置する有馬条里遺跡でこの時期の集落遺跡が判明しているが、本遺跡の位置する利根川・

吾妻川合流点では明確でない。水田農耕集落の本格的な進出・定着は弥生後期に入つてからである。弥生後期遺跡としては、吾妻川左岸段丘面に位置する中郷田尻遺跡(6)・田尻遺跡(11)、利根川右岸の低位段丘(白井II面)に位置する白井掛岩遺跡(27)が知られる。利根川対岸の赤城山西麓では見立相好遺跡(60)・樽舟戸遺跡(61)・田尻遺跡(63)・見立溜井遺跡(64)など後期後半の集落がまとまってみられる。吾妻川右岸では後期でも前半の遺跡が目立ち、水田農耕集落の定着が他よりもやや早かつたようである。

第1表では古墳時代を前・中・後の3期に細分した。概ね前期は3世紀後半～4世紀、中期は5世紀、後期を6～7世紀と推定して掲げた。古墳時代前期としては中郷恵久保遺跡(2)・白井北中道III遺跡(19)・八幡神社遺跡(56)があり、後期弥生遺跡の立地を継承する傾向がうかがえる。古墳時代中期としては、6世紀初頭前後のHir-FAに覆われた遺構が多い。Hir-FAの下面からは水田や畠、古墳、方形周溝墓(低墳丘墓)が確認されている。集落は吾妻川右岸の金井東裏遺跡(46)や金井下新田遺跡(45)で判明しているが、吾妻川左岸では吹屋莊屋遺跡(5)をはじめとした田畠遺構や墳墓の存在から、周囲に集落の存在が想定される。利根川右岸の浅田遺跡(16)、合流点の吾妻川右岸にある坂下町古墳群(38)・東町古墳(36)は竪穴系石室をもつ積石塚とみられる。封土をもつ円墳としては金井東裏遺跡1号・2号墳が知られる。本遺跡で判明した低墳丘を持つ方形周溝墓の類例は、田尻遺跡(11)や丸子山遺跡(50)・黒井峯遺跡(54)・見立溜井遺跡(64)で知られており、古墳時代前～中期とみられる。5世紀代の墳墓として、封土墳・積石塚・円・方・低墳丘墓の各形態がみられることは、当地域の古墳社会に複数の階層・職分差が存在したことの発現といえよう。ところで、当地域ではHir-FA直下の地表面に馬蹄痕がしばしば検出されることから、5世紀後半代には馬を飼育していたことが判明している。金井下新田遺跡(45)で発見された若齶馬の骨はそのことを如実にものがたる。ただし、広範囲にわたってウマを放牧していたと推定できるのは6世紀前半代であろう。第1表の古墳時代後期に記した遺跡の多くは、Hir-FA直下の地表面に夥しい馬蹄痕が残されている。そのほとんどが雑然とした状態で、大小の馬蹄痕が入り乱れている。当時の地表面にはスキ



第6図 周辺遺跡分布図

等の草が生えていたことが判明しているので、格好の牧草地であったと考えられる。白井佐又遺跡(20)では立木が多く、耕作中と思われる痕跡を残すHr-FP直下前の景観が復元されている。放牧地の範囲については、利根川右岸の段丘である長坂面と白井Ⅰ・Ⅱ面を主とした約5.8kmが推定されている(斎藤2010)。またHr-FP軽石で覆

われた当時の地表面は、炭化物や焼土の混在する黒ボク土で、畦や畝の痕跡から畠として使われた可能性も指摘される。Hr-FP直下での集落遺跡は、中郷恵久保遺跡(2)・吹屋恵久保遺跡(3、市調査分)・吹屋糀屋遺跡(5)・黒井峯遺跡(54)・西組遺跡(53)等で判明している。これらは利根川と吾妻川に挟まれた段丘面のうち、高位の雙林

第1表 周辺遺跡一覧

番号	遺跡名	田石器	縄文	弥生	古墳				奈良 平安	中 ~近世	備考	文献番号
					前期	中期	後期					
1	吹屋東久保遺跡(本報告)		●		○	○	○	○			集落、扇、放牧	1
2	中郷東久保遺跡		○		○	○	○	○			Hr-PP下住居	2
3	吹屋東久保遺跡(市報告)										水田	3
4	北牧六堆遺跡										古墳集落・田畠、平安集落	4
5	吹屋扇屋遺跡	●	●		○	○	○	○			牛糞廐、古墳水田、平安集落	5
6	中郷扇丘遺跡		○	○	○	○	○	○			圓窓水堀、古墳水田	6
7	吹屋三角遺跡										古墳島、放牧	7
8	吹屋原山遺跡	●	○								古墳集落・田畠	7
9	吹屋大字塚遺跡	●	●	●							古墳島、放牧	7
10	白井北中道II遺跡		○								古墳島、放牧	7
11	田尻遺跡				○	○	○	○			方形周溝墓、古墳放牧	8・9
12	解沢丘山遺跡・吹屋瓜田遺跡		●								古墳水田	10・11
13	上日西伊能遺跡	●	○								古墳放牧	12・13
14	中郷遺跡	●	●								古墳島、放牧	14・15
15	吹屋遺跡	●	●	○							古墳島、放牧	16
16	鶴田遺跡					○					Hr-FA下古墳	
17	吹屋勢森遺跡		○								古墳島、放牧	17
18	白井二ノ道跡		○								古墳島、放牧	18
19	白井北中道III遺跡		○	○	○	○	○	○			発生未~古墳初集落、古墳島・放牧	19・20
20	白井佐久道跡		○								古墳島・放牧	21・22
21	白井北中道遺跡2	●									古墳放牧	23
22	白井北中道遺跡3	●									古墳放牧	24
23	白井北中道遺跡	●									古墳放牧	27・28・29
24	白井北中道跡										古墳放牧	27・29
25	白井大宮遺跡										古墳放牧	30
26	白井北中道II遺跡		○								古墳放牧、平安住居	31
27	白井磐岩遺跡	●	●								古墳放牧、Hr-PP後古墳、平安集落・製鉄	32
28	白井北中道遺跡	●									古墳島・放牧、Hr-PP後集落、奈良~平安集落、製鉄	27・33
29	白井北中道遺跡3										奈良~平安集落	34
30	白井大橋遺跡										平安集落	35
31	白井二位原遺跡										古墳放牧、奈良~平安集落	36
32	白井二位原屋遺跡	●	●								古墳~平安集落	25・27
33	白井押谷II遺跡										平安製鐵	37
34	白井二位原遺跡1・II・4・5										古墳放牧、奈良~平安集落	38
35	白井大野遺跡											39
36	東町古墳				○						磐穴系石室横石塚古墳	40
37	坂之下遺跡										吉墳水田、平安集落	41
38	板下I古墳群										Hr-FA下古墳	40
39	金井神社遺跡										製鉄	42
40	金井神社古墳										磐穴系石室古墳	43
41	金井前原II遺跡		○								弥生住居、奈良製鉄	44
42	金井原遺跡										奈良~平安集落	45
43	金井原古墳										磐穴系石室古墳	46
44	逆田遺跡				○						弥生中期	47
45	金井新田遺跡		○	○	○	○	○	○			弥生集落、扇。古墳高い遺構、祭祀・人骨・馬骨	48・49
46	金井東雲遺跡		○	○	○	○	○	○			弥生集落、扇、古墳集落・祭祀・古墳・人骨	50・51
47	金井山I古墳					○					磐穴系石室古墳	52
48	北牧稻田遺跡										吉墳水田、平安集落	53
49	畠ヶ原遺跡										吉墳水田、批水田	54
50	丸子II遺跡		○	△	○	○					弥生土坑、古墳島・扇。古墳高い遺構、Hr-FA上稍石塚	54
51	中ノ峯古墳										Hr-FA:古墳、Hr-PP後遺跡	55
52	押手遺跡	●	○	○		○	○				方形周溝墓、古墳集落・祭祀、平安集落	56・57
53	西船遺跡										吉墳集落、擬定馬小屋	58
54	黒井遺跡										吉墳集落、扇・擬定馬小屋・祭祀・水場等	59・60
55	中船遺跡	●									吉墳島・道	61
56	八幡神社遺跡	●									吉墳集落、扇	62
57	宮田遺跡										吉墳水田	63・64
58	宮田菅原遺跡										吉墳祭祀	65
59	宮田木ノ木遺跡										吉墳住・祭祀	66
60	見立村野遺跡										圓窓草・前集落、弥生集落、古墳集落	67・68
61	鷲舟II遺跡										集落、祭祀	69
62	鷲舎遺跡			●							鷲舎式土器標式遺跡	70
63	田尻遺跡										弥生集落、新耕	71
64	見立井井遺跡・見立溜井II遺跡	●	○	○	○	○	○	○			弥生末~古墳集落・方形周溝墓群	72・73
65	湖南古墳遺跡	●	○			○	○				吉墳集落、湖面西小島古墳	74・75
66	中郷遺跡	●	●	○							中郷十二・三場古墳、平安集落	74・75
67	岡谷II遺跡	●	●	○							圓文中朝期溝溝、平安集落	76・77
68	三室田遺跡										圓文中朝期梯壇状集落	78・79・80
69	白井古墳群										Hr-PP後古墳群	19
70	白井城										中世長尾氏城	

第3章 周辺の地形と歴史的環境

寺面(沼田面)から長坂面南部・恵久保面に分布する。鰐沢川等の開析谷や、吾妻川左岸の白井II面に見られる低地に面した古地と考えられる。大量に降下堆積したHr-FPによって、当地域の景観は一変し、黒井峯遺跡や西組遺跡のように放棄された集落も多かったであろう。堆積量のやや少なかった白井地区南部では数十年後の集落復興が見られ、白井南中道遺跡(28)や白井二位屋遺跡1・II・III(31・34)では竪穴建物が確認されている。白井掛岩遺跡や白井古墳群などHr-FP上に築造された古墳も判明している。奈良時代以降の集落遺跡は白井地区で継続して存在し、古墳時代後期集落の展開した吾妻川左岸の中郷恵久保遺跡や吹屋稲屋遺跡の周辺でも集落復興が始まっている。当地域では製鉄関連遺構が多く分布しており、白井掛岩遺跡(27)・白井南中道遺跡(28)・白井吠谷戸遺跡(33)・金井製鉄遺跡(39)・金井前原II遺跡(41)等が知られる。中世では利根川との合流点の吾妻川左岸に立地する白井城(70)が、長尾氏の居城として著名である。

文献

- 高橋 駿2010「古墳時代後期における集落とその周辺の景観」『研究紀要』
28 群理文 pp.109-124
吉田英嗣2013「利根川・吾妻川合流点付近における段丘の離水時期に基づく離水期以降の利根川の河床変動」『駿台史学』148 pp.139-151

参考文献

- 群理文2006『中郷恵久保遺跡』
- 茨城県教育委員会・(有)毛野考古学研究所2006『吹屋恵久保遺跡』
- 群理文2004『北牧古墳遺跡』
- 群理文2007『吹屋稲屋遺跡』
- 群理文2007『中郷吹屋遺跡』
- 群理文2007『中郷・北舟遺跡』
- 群理文1996『白井北中道II遺跡 吹屋天子塚遺跡 吹屋中原遺跡 第1分冊(古代・中近世編)』
- 子持村教育委員会2005『田尻遺跡 第11地点』
- 子持村教委1992~2005『年報』11~24
- 群理文1996『吹屋瓜田遺跡』
- 子持村教育委員会2000『解説瓜田遺跡』
- 群理文2010『上白井伊豆野路・旧石器時代編』
- 群理文2010『上白井伊豆野路・縄文時代以降編』
- 群理文2010『中郷遺跡(2)臼石器・攢文時代編』
- 群理文2008『中郷遺跡(1)・古墳時代以降編』
- 群理文2007『吹屋遺跡』
- 群理文2006『吹屋伊勢森遺跡』
- 群理文2008『白井十二遺跡』
- 群理文2009『白井北中道III遺跡(1)・弥生時代以降編』
- 群理文2009『白井北中道III遺跡(2)・縄文時代編』
- 子持村教育委員会・技研測量設計株式会社2005『白井佐又遺跡』
- 茨城県教育委員会2010『白井佐又遺跡』
- スナガ環境測量株式会社2014『白井北中道遺跡2』
- 有限会社毛野考古学研究所2021『白井北中道遺跡3』
- 群理文1994『白井遺跡群・集落編I』
- 群理文1996『白井遺跡群・集落編II』
- 群理文1997『白井遺跡群・古墳時代編』
- 群理文1998『白井遺跡群・攢文時代編』
- 群理文1998『白井遺跡群・中世・近世編』
- 群理文1993『白井大宮遺跡』
- 群理文2002『白井大宮II遺跡』
- 茨城市教育委員会・技術コンサル株式会社2016『白井掛岩遺跡』
- 子持村教育委員会・子持村遺跡調査団1998『白井南中道遺跡』
- (有)毛野考古学研究所2014『白井南中道遺跡3』
- 群理文2009『白井玉椿遺跡』
- 茨城県教育委員会2005『白井二位屋遺跡』
- 茨城県教育委員会2014『西川内山発掘調査報告書 白井吠谷古墳群ほか』
- (有)毛野考古学研究所2012『白井二位屋遺跡4』
- 茨城県教育委員会2021『白井尖野遺跡』
- 尾崎喜在雄1971『古墳文化』(北群馬・茨城の歴史)
- 茨城県教育委員会1988『坂之下遺跡』
- 茨城県教育委員会1975『金井製鉄遺跡発掘調査報告書』
- 茨城県教育委員会2019『平成26年度範囲確認調査 金井調査古墳群』『茨城県内道路』12
- 茨城県教育委員会1997『金井前原II遺跡』
- 茨城県教育委員会1980『市内道路II 金井前原道路』
- 『茨城県誌』第二巻
- 茨城県教育委員会2020『逆川遺跡』『茨城地区道路調査報告書1』
- 群理文2011『金井下新田遺跡 古墳時代編』
- 群理文2021『金井下新田遺跡 縄文時代・弥生時代編』
- 群理文2018『金井東裏遺跡・近世・弥生・縄文時代編』
- 群理文2019『金井東裏遺跡 古墳時代編』
- 茨城県教育委員会1978『丸山古墳発掘調査報告書』
- 子持村教育委員会2000『北牧相ノ田遺跡』
- 子持村教育委員会2005『丸子山遺跡』
- 子持村教育委員会1980『中ノ峯古墳発掘調査報告書』
- 子持村教育委員会1987『押手遺跡発掘調査概報』
- 石井克己1987『原田・古代』子持村誌 上巻
- 子持村教育委員会1985『西組遺跡』
- 子持村教育委員会1985『黒井峯遺跡I』
- 子持村教育委員会1990『黒井峯遺跡発掘調査報告書』
- 子持村教育委員会1990『中組遺跡』
- 群理文1992『年報』11
- 山本良和1961『宮代町界隈古道横断調査概報』『時報』25群馬大学史学会
- 山本良和1986『宮代町界隈古道』群馬県史 資料編2 原始古代2
- 勢多郡赤城村教育委員会1998『宮田愛宕遺跡』
- 勢多郡赤城村教育委員会1995『宮田畠ノ木遺跡』
- 勢多郡赤城村教育委員会2005『見立船好遺跡I・II』
- 勢多郡赤城村教育委員会2005『見立相好遺跡III』
- 勢多郡赤城村教育委員会1999『轉門ノ道跡』
- 杉原任介1939『上野櫛道路調査概報』『考古学』10-10
- 勢多郡北橘村教育委員会1999『八崎の宿居・田尻遺跡』
- 勢多郡赤城村教育委員会1985『見立船井遺跡・見立大久保遺跡』
- 群理文1986『中畦道路 諏訪西道路』
- 群理文2000『中畦道路 諏訪西道路』
- 群理文1988『房谷丁遺跡I』
- 群理文1992『房谷丁遺跡II』
- 群理文1992『房谷丁遺跡III』
- 群馬県企業局1980『三原田遺跡I』
- 群馬県企業局1990『三原田遺跡II』
- 群馬県企業局1992『三原田遺跡III』

第4章 検出された遺構と遺物

1 遺構の概要

この度の調査対象となった吹屋恵久保遺跡(吹屋交番地点)では、方形周溝墓1基と土坑2基、土器集中出土地点1箇所が確認された。また、降下テフラに覆われた当時の地表面では、馬蹄痕を多数検出している。時期はいずれも古墳時代に属し、推定される細分時期については、個々の項目で述べる。

以下に調査面の順に、人為的遺構と残された痕跡について記載する。

(1) 調査1面

Hr-FP上面 棚名ニツ岳伊香保テフラ(Hr-FP)層の上面にあたる。6世紀後半以降の遺構は検出できなかった。落ち込みと認められたのは、全て現代の建物基礎や廃棄に伴う擾乱坑である。この面の南半で一辺15mほどの矩形で、Hr-FPが見られず上面を削平された黒色土面が確認できた(PL. 1)。これは方形周溝墓盛土上位の後世削平面であることが、その後の調査進捗によって判明した。

(2) 調査2面(第7図)

Hr-FP直下の暗褐色土面であり、Hr-FP降下直前の地表面にあたる。この調査面で、方形周溝墓墳丘削平面の北辺と東辺ラインが判明し、高さ1m以上の墳丘規模を有することが想定できた(PL. 2)。

馬蹄痕 Hr-FP降下直前の旧地表面では、多数の馬蹄痕が確認された(PL. 3)。馬蹄痕の分布は、方形周溝墓墳丘斜面の全域に及び、粗密は明瞭でない。第7図に示した馬蹄痕(○)は圧痕形状が明瞭に残されたものであり、夥しい重複のある部分は個々の圧痕が判別困難なため、図示していない。このため、○マークの多寡は必ずしも馬蹄痕密度を示すものではない。馬蹄痕の大きさは、写真で判断される明瞭な例で長さ12cm前後、幅10cm強を測る。深さは1cm前後とみられるが、計測はしていない。また、馬蹄痕のなかには明らかに小型のものが混在することから仔馬の存在が推測できる。馬蹄痕の大きさから、從来から指摘されている「木曾馬」クラスの中型馬と考えてよいだろう。明瞭な馬蹄痕の中で、二つの馬蹄痕が同

一方で上下左右にずれて検出される例(PL. 3-11)は、並足程度で歩行した痕跡と考えられる。

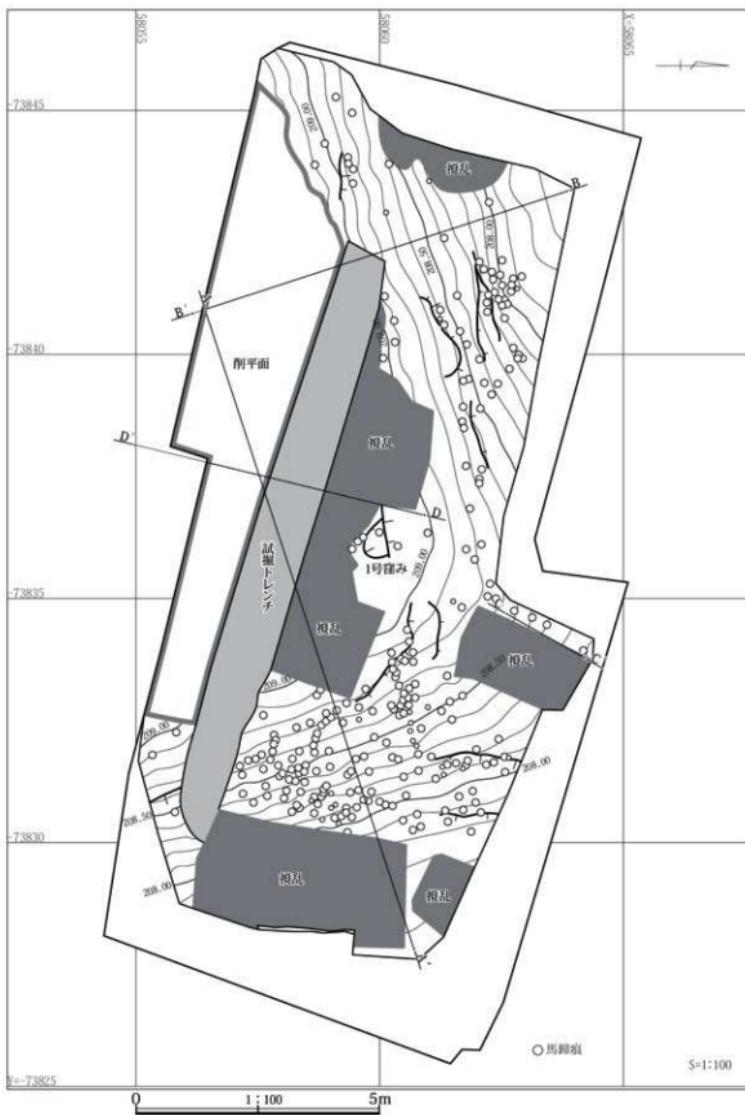
道状痕跡 方形周溝墓墳丘法面の各所に段状部分がみられ(第7図)、調査担当者により段下が帶状に硬化していたとの所見がある。このことから墳丘法面に網目状に残された「踏み分け道」の可能性がある。ただしヒト足跡が検出されず、馬蹄痕分布が一定しないことや、明瞭な平坦面や溝として残されていないことから、「道跡」として認定できる確証を欠くといわざるを得ない。

なお、調査2面とした当時の地表土は、下位に堆積するHr-FAの土壤化したものであり、断面で炭化物の混在が確認されている。

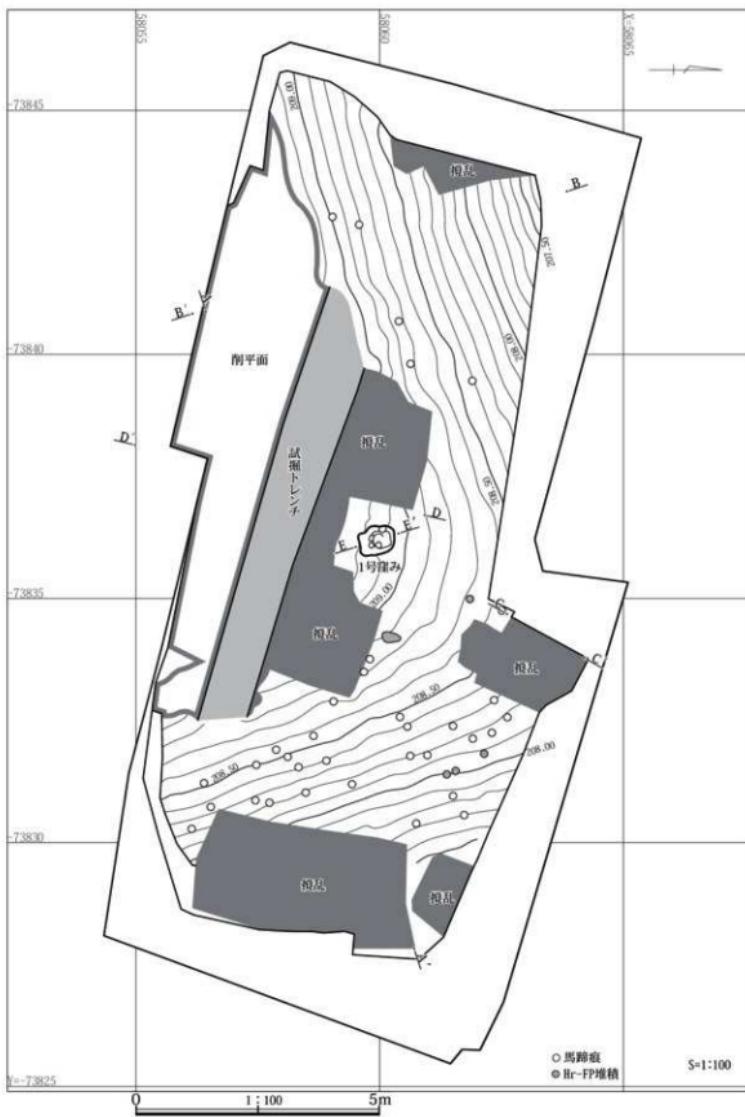
(3) 調査3面(第8図)

Hr-FA直下面であり、6世紀初頭頃の棚名山噴火直前の地表面にあたる。方形周溝墓墳丘の形状はかなり明瞭であるが、土層断面に残る盛土層に数cmほどの土壤化した黒褐色土が覆う(第12図)。後掲の付篇で報告するように、旧地表面を覆うHr-FAは、下からS₁・S₂・S₃のテフラメンバーが確認されている。最初の降灰であるS₁は水分を含んだ泥状と考えられており、これにより直接覆われた旧地表面を検出したことになる。

馬蹄痕 この面でも馬蹄痕が確認されている(PL. 4)。ただし、Hr-FP直下面のように馬蹄痕同定が可能な明瞭な圧痕は極めて少ない。写真図版PL. 4-15は、調査3面で検出された馬蹄痕と推測された検出状況である。15×14cmの楕円形窪みとして検出され、中央に充満する黄白色堆積物がS₃、周縁を囲む灰色堆積物がS₁、その間に挟まる粗粒堆積物がS₂である。PL. 4-16は同様な楕円形窪みの断面である。これによれば、最終堆積物であるS₃がレンズ状の堆積状況で埋填したことを示す。このことはS₁とS₂の段階では直径10cmの大の窪みであったことになる。この痕跡が馬蹄痕と想定した場合、どの時点で形成されたかが問題になる。Hr-FA降下前の圧痕ならば、層厚10cmに及ぶS₁で完全に埋もれてしまうのではないかと思う。S₁降下後に一定時間をおいて踏み込まれたのであれば、そこに形成された窪みにS₂とS₃が順次堆積するこ

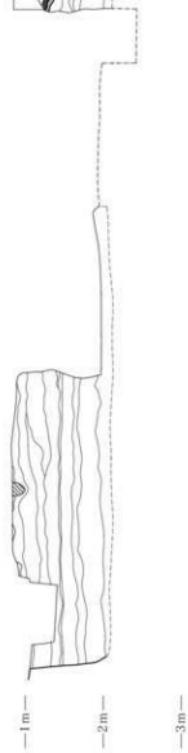


第7図 調査2面(Hr-FP下面)平面図

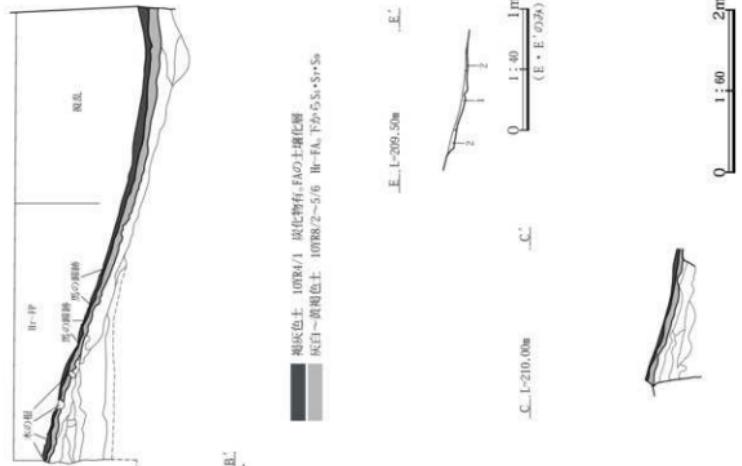
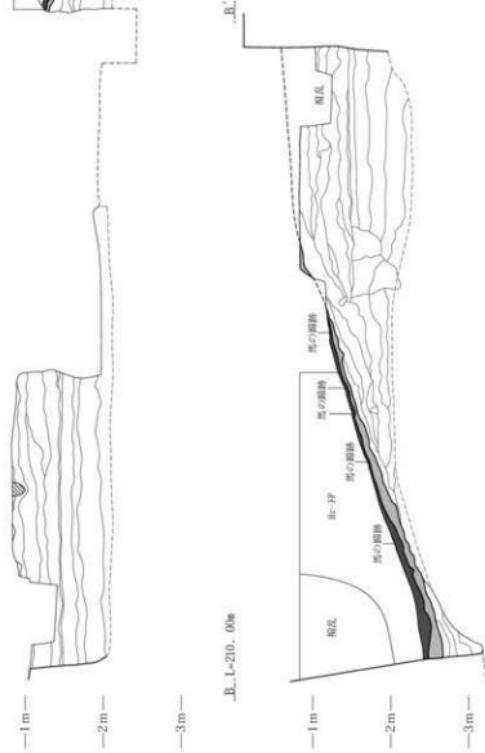


第8図 調査3面(Hr-FA下面)平面図

A. I=210.00m



14



第9図 方形周溝墳上面の土層断面図

とは考えられよう。他の馬蹄痕として検出された椭円形圧痕には、掘削底面にHr-FAの残っている例が散見される。このことから調査3面で確認された馬蹄痕形成は、Hr-FA降下前とは言い切れず、Hr-FA堆積イベントの途中段階の可能性を挙げておく。なおこの面での馬蹄痕は、粘性を帯びたシルト質の火山灰が充填するため、圧痕面の検出が極めて難しく、同定作業に課題を残している。

1号窟み 方形周溝墓埴丘の北隅上端にあたるX=58060、Y=-73836の位置に不整長方形の窟みが検出された(第8図)。これは、底面に集中して踏み込まれた馬蹄痕と思われる圧痕群で、Hr-FA堆積後も窟んでおりHr-FAで埋没していた(PL. 3-12)。長軸70cm、短軸60cm、最深底面の比高14cmを測る。浅い船底状であるが、人為的な掘削構造とは考え難い。出土遺物はない。

(4) 調査4面(第10図)

Hr-FA直下の黒褐色土層を除去した段階で盛土面が検出された。これは方形周溝墓埴丘盛土と考えられ、完成された埴丘形状に最も近い状態と判断された。

方形周溝墓埴丘面 北辺と東辺で整った平面の埴丘法面が検出された。東西軸長は11m、南北軸長4.5mまで検出されており、未調査区の南・西方向に続く。平面形は確定できないが、正方形か長方形のいずれかであろう。北辺ラインを参考にすると、埴丘主軸方向はN-70°-Eを指す。埴丘法面の勾配角は北辺が18度前後、東辺が15~18度である。等高線分布で明らかなように、一定の勾配が保たれており、乱れはほとんど見られない。北コーナー角が丸みを持つが、当初からの形状か風化によるものかは判断できない。埴掘部からの埴丘高は1.7mで、後世の削平による上位平坦面部分を推定復元すれば2mを越える高さであったと考えられる。

周溝 調査区北西端では北辺を画する周溝の内側法面が検出された(第9図B-B')。勾配角は60~70度と急傾斜で、埴掘からの深さは0.5mを測る。周溝幅と断面形は不明である。東辺縱断面(A-A')に見られる周溝は幅1m弱で深さは0.2mと浅く、北辺縱断面(B-B')に比べて規模が小さい。

(5) 調査5面(第11図)

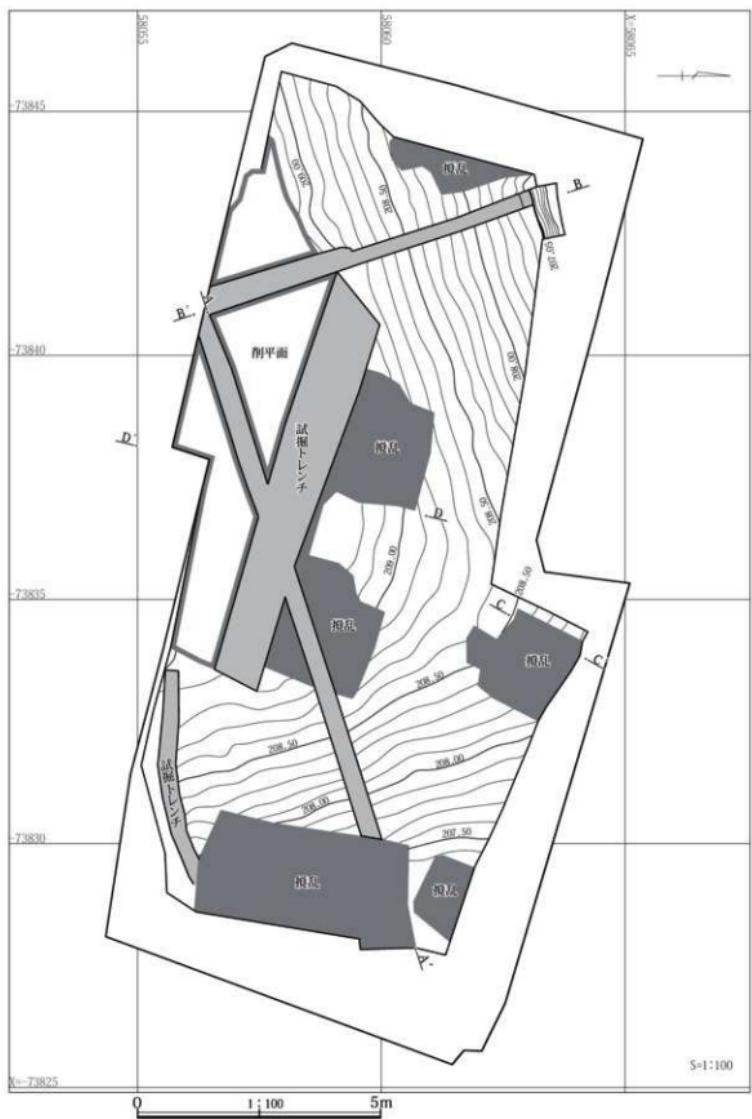
方形周溝墓埴丘の盛土を除去した地業面にあたる。

埴丘盛土 墓丘構築時の旧表土層にあたる黒褐色土(基本IV層)を基盤とし、概ね上下2層の盛土を構成する。

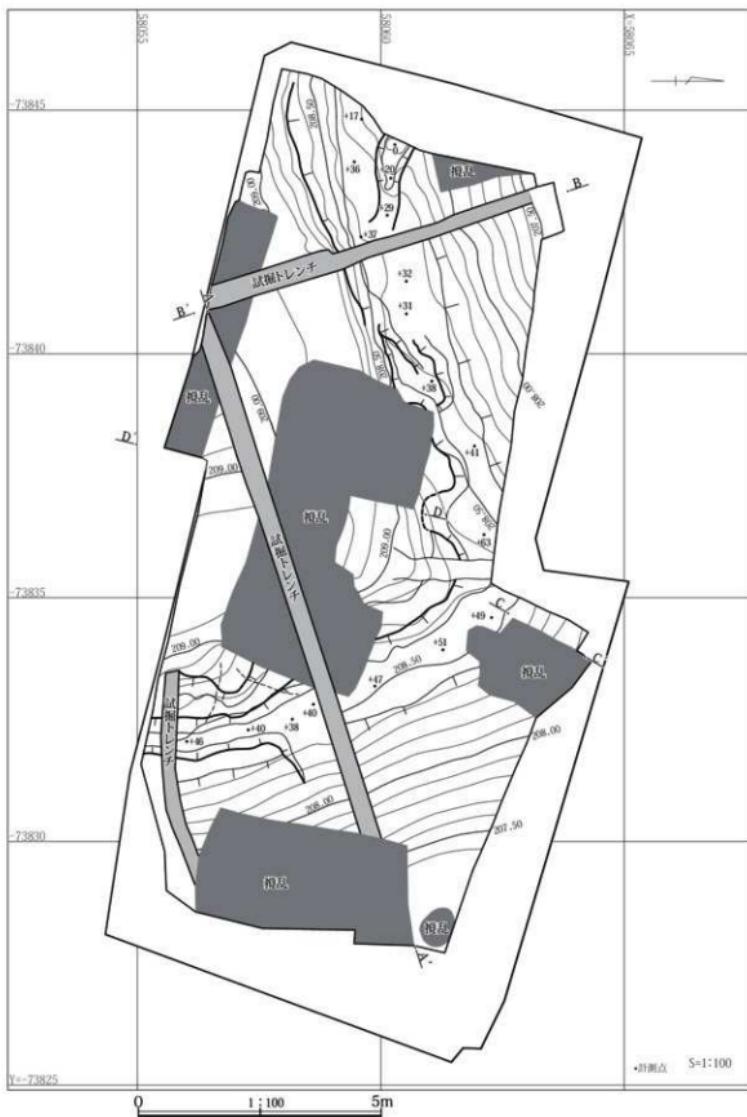
下層は、埴丘頂部を中心に約0.5mの高さで黒褐色土を積み上げる。旧地表面の標高は208.5m前後で、埴丘法面の中位にあたり、これより上位は黒褐色盛土の対象となる。これより低い周縁法面は地山を削り出し、埴掘付近から周溝では黄褐色ロームに達する。黒褐色盛土の上は、ローム塊を基調とする黄褐色盛土で覆う(PL. 6-21)。これは凹凸面をなくす整形を兼ねた埴丘面構築と考えられ、盛土の厚さは一定しないが、埴丘頂部付近では0.3m前後と類推される。盛土下層が黒褐色土で、上層が黄褐色ローム土なのは、周溝墓プランに沿って削り出した地山を順次中央に積上げた結果であろう。

埋葬部 墓丘上面では理葬施設は確認されていない。調査区南辺中央のDセクション南端部で、埴丘上位削平面の10cmほど下位から南側にかけて傾斜する黄褐色土堆積がみられた(第12図Dセクション12層、PL. 6-23)。堆積下端は旧地表面に達しており、埴丘中央では異常に深い。全形プランと想定規模から、この傾斜が埴丘南辺の法面となることは考えにくい。近隣の方形周溝墓例を参考にすれば、埴丘輪郭をドーナツ状に盛土したのち中央窓みに盛土を行う手順がみられることから、この中央窓み部への黄褐色土盛り土と考えておく。

テラス構造 墓丘の北辺から東辺の中段に、埴丘中央盛土部を囲むように帯状のテラス構造がめぐらされている。これは旧地表面を0.1~0.2m削り出したもので、東辺に沿った場所では2段の溝状になり(PL. 7-30)、東辺中央に直交して埴掘へ下る形状、また北辺西側でも埴掘部から斜上する溝状部がみられる(第11図)。調査担当者の所見では、テラス面はやや硬質であったので構築時ににおける「作業道」との想定が示された。ちなみに、テラス構造の各所における平坦面レベルを、最も低い西端溝状部を0としてcm単位で図示した(第11図)。低い場所で+31、高くて+51であり、0.2mほどの比高はあるが、一定の勾配は認められないでの、旧地表面レベルが反映されたと考えられる。掘削された段状部には掘削工具痕が明瞭に残っており(PL. 7-29・31)、窓みに黄褐色土塊が埋積していて、掘削面を整形した痕跡はうかがえない。このことから、2段築成の埴丘とは考えにくい。このテラス部には黄褐色ローム基調の埋土堆積がみられる(第12図、PL. 7-31)。調査担当者所見では、盛土上層のローム土が流失再堆積したと推定している。筆者は、以下の

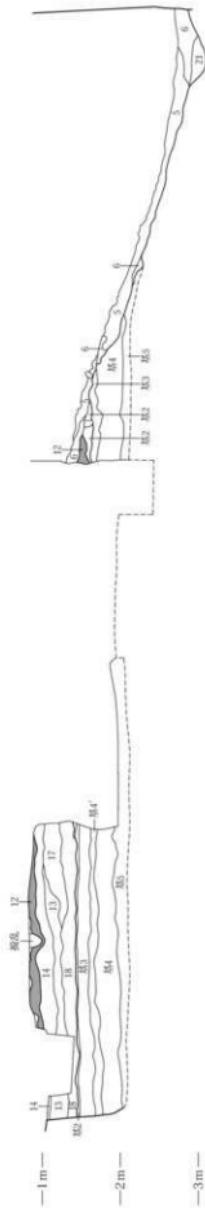


第10図 調査4面(埴丘盛土面)平面図

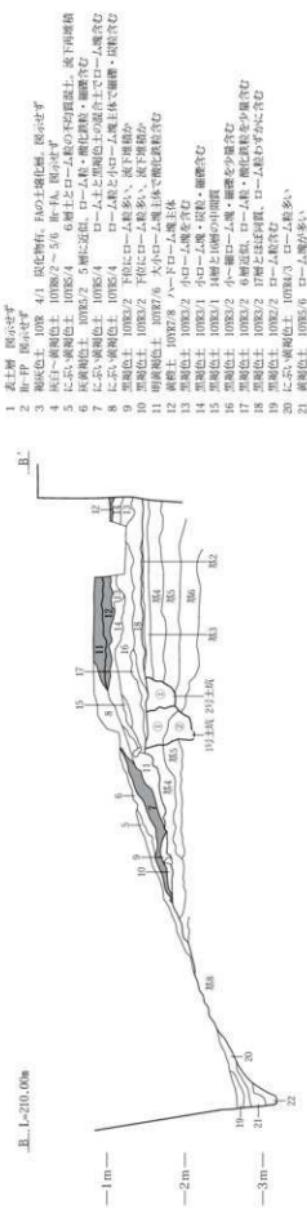


第11図 調査5面(埴丘構築面)平面図

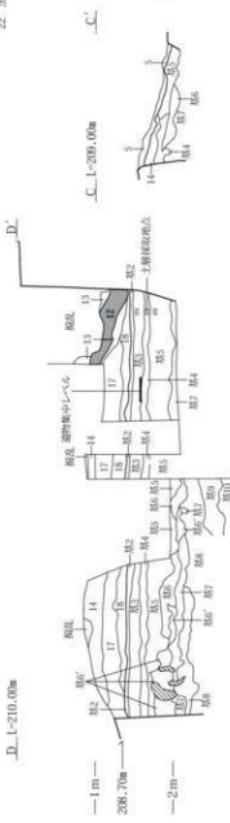
A'.



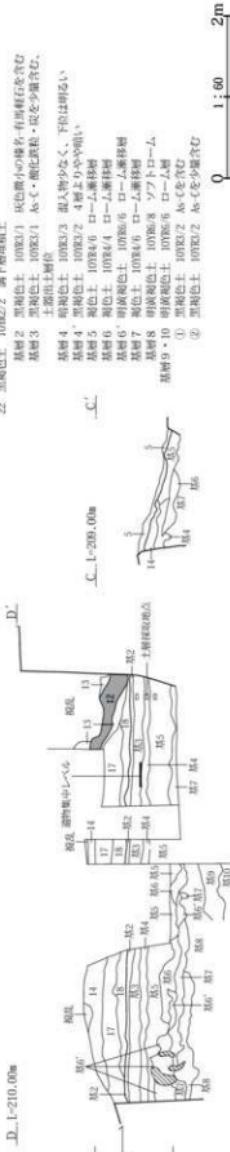
B'.



C'.



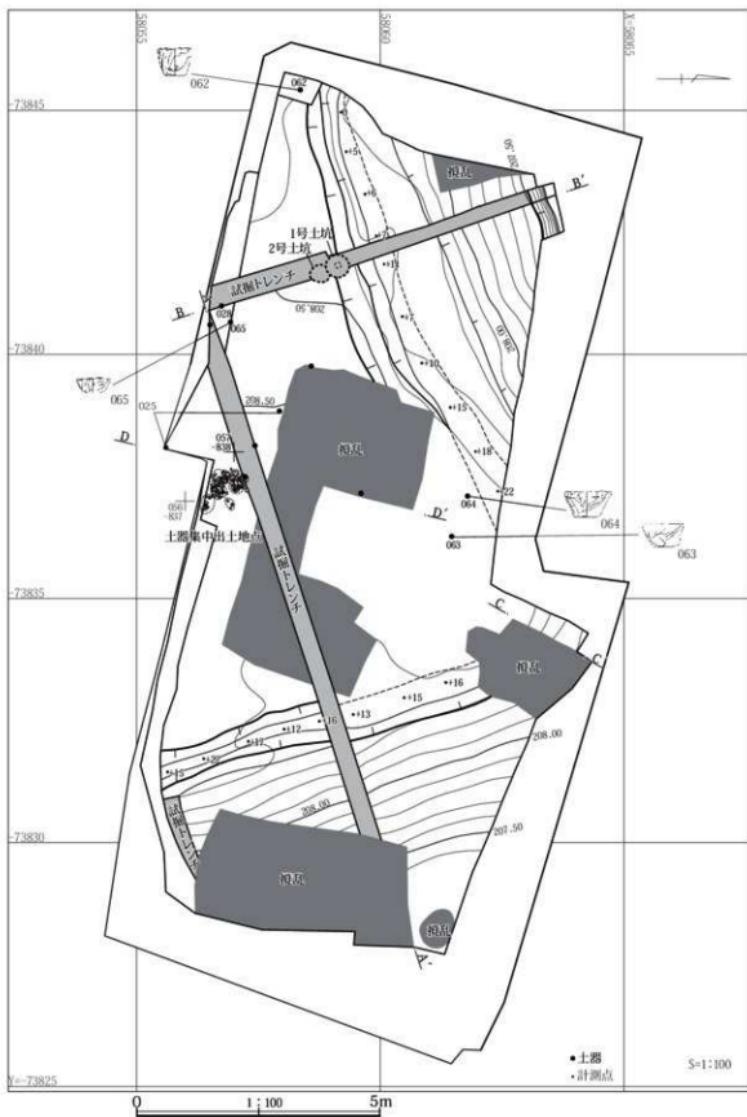
D'.



第12図 方形湖溝堆丘断面図

- 1 表土層 固結せず
2 ハーフ IP 岩質
3 黒褐色土 1098.41 硫化物石、FAO上層地盤、固結せず
4 黒褐色土 1098.41 硫化物石、FAO上層地盤、固結せず
5 黑褐色土 1098.52 砂土とロームの固結質土、地下水帯付
6 民営施設土 1098.53 砂土とロームの固結質土、地下水帯付
7 にごく薄黒褐色土 1098.54 ロームと土質化した砂土で構成
8 にごく薄黒褐色土 1098.54 ロームと土質化した砂土で構成
9 黑褐色土 1098.52 下方にローム多く、灰褐色地体で構成
10 黑褐色土 1098.52 下方にローム多く、灰褐色地体で構成
11 明瞭褐色土 1098.76 小ロームと灰褐色地体で構成
12 黄褐色土 1098.78 ハードロームと灰褐色地体
13 黄褐色土 1098.72 小ロームと灰褐色地体
14 黑褐色土 1098.71 小ロームと灰褐色地体
15 黑褐色土 1098.71 小一細ロームと灰褐色地体
16 黑褐色土 1098.72 小一細ロームと灰褐色地体
17 黑褐色土 1098.72 6種近似、ローム多く
18 黑褐色土 1098.72 17種とはほぼ同質、ローム多く含む
19 黑褐色土 1098.72 ローム多く含む
20 にごく薄黒褐色土 1098.73 ローム多く
21 黄褐色土 1098.66 ハードローム
22 黑褐色土 1098.72 黑褐色地土
- 基層2 黑褐色土 1098.11 灰色帶小の块状有機鉱物を含む
基層3 黑褐色土 1098.11 灰色帶小の块状有機鉱物を含む、
土壌由来物
基層4 黑褐色土 1098.23 脂肪滴少なく、下位は明認
基層4 黑褐色土 1098.23 脂肪滴少なく、下位は明認
基層5 黑褐色土 1098.24 4割りや少少脂肪
基層5 黑褐色土 1098.24 4割りや少少脂肪
基層6 黑褐色土 1098.4 / 4 割りや少少脂肪
基層6 黑褐色土 1098.4 / 4 割りや少少脂肪
基層7 黑褐色土 1098.4 / 6 ローム混入
基層8 黑褐色土 1098.4 / 6 ローム混入
基層9 0.1 黑褐色地土 1098.6 / 8 ソフトローム
(1) 黑褐色土 1098.2 4割りや少少脂肪
(2) 黑褐色土 1098.2 4割りや少少脂肪

0 1:60 2m



第13図 調査6面(填丘下旧表土面)平面図

理由から故意に地上整形したものと考えたい。

- ①墳丘の最終形状として整った法面とするには、テラス部を埋める必要がある。②不慮の流入堆積には土量が多く、その割に法面中位以下周溝まで堆積していない。③流入堆積後に「作業道」を復旧した形成が見られない。

テラス部断面に堆積した黄褐色土は、黒色土粒を含む土塊状で傾斜面に沿った片流れの堆積状況を示す(PL. 7-31)。これは上位からの流下堆積とみてよいが、降雨や崩落などの不慮によるものではなく、人為的に上位の盛土を搔き降ろした結果の堆積状況と理解しておく。なお、テラス構造の目的については、調査担当者の推定による墳丘構築の「作業道」説に従いたい。墳丘構築では、テラス下の地山も深さ0.8mほど、さらに0.5mの深度で周溝を掘削する。この時の掘削された黄褐色ロームが上層盛土に使用されたと考えられることから、そのための作業足場としても有用だったと思われる。

出土遺物 墳丘盛土から古墳時代前期の土器片が少量出土した。後述するように、墳丘下に堆積する土器が土盛築成時に混入したものであろう。

(6) 調査6面(第13・14図)

方形周溝墓の墳丘直下面で、旧地表を構成する黒ボク土層が対象となる。

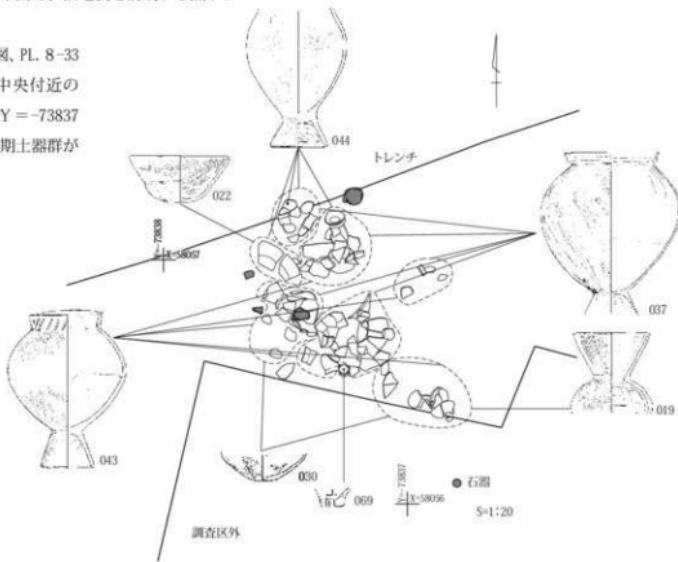
土器集中出土地点(第14図、PL. 8-33

~34)方形周溝墓墳丘中央付近の直下で、X = 58057、Y = -73837の地点から古墳時代前期土器群が

集中して出土した。範囲は1.2×0.9mで、南側未調査区に連続する可能性が大きい。出土層位は旧地表面下10~15cmの黒褐色土層である。掘り込みは確認できなかった。器種は直口壺(019)、壺(022)、台付甕(037・043・044)、有孔鉢(069)が見られ、完形に復するものはない。

集中出土地点とは別に、同一層位から手捏ね土器4点(062~065)が散在状態で出土した(第13図)。いずれも浅鉢形の完形品で、方形周溝墓築成時に関わる供獻とも推測されたが、旧地表下の出土であり故意に埋めたと認められない限りは否定的である。

土 坑 方形周溝墓北辺のBセクションで、2基の円形土坑が南北方向に重複して確認された(第13図、PL. 8-36)。1号土坑は直径0.5m以上、深さ0.6m。2号土坑は直径0.42m、深さ0.35mである。重複断面によれば、2号土坑が新しい。また掘り込み上端は、方形周溝墓盛土直下であり、旧地表を切っている。埋土はAs-Cを含む黒褐色土である。出土遺物はない。以上から、掘削されたのは墳丘構築時以前に間違いないが、埋土と検出層位から弥生時代以前の可能性は少ないと考える。



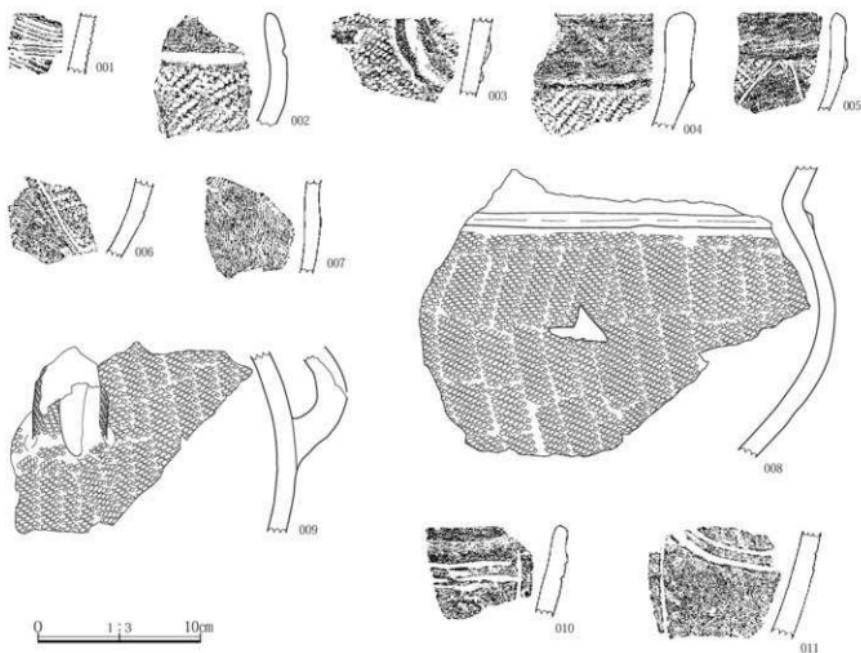
第14図 土器集中出土地点

2 出土遺物(第15~20図)

方形周溝墓墳丘盛土内と下位黒褐色土層から縄文土器、石器、弥生後期～古墳前期土器、鉄器が出土している。縄文土器は中期末～後期が主体でわずかに前期を含む。第15図に掲げた11点以外の未掲載数は60点である。縄文時代の石器は、第16図に掲げた2点のほか、未掲載の二次加工ある剥片1点がある。

出土遺物の主体は古墳時代前期の土師器になる。第14

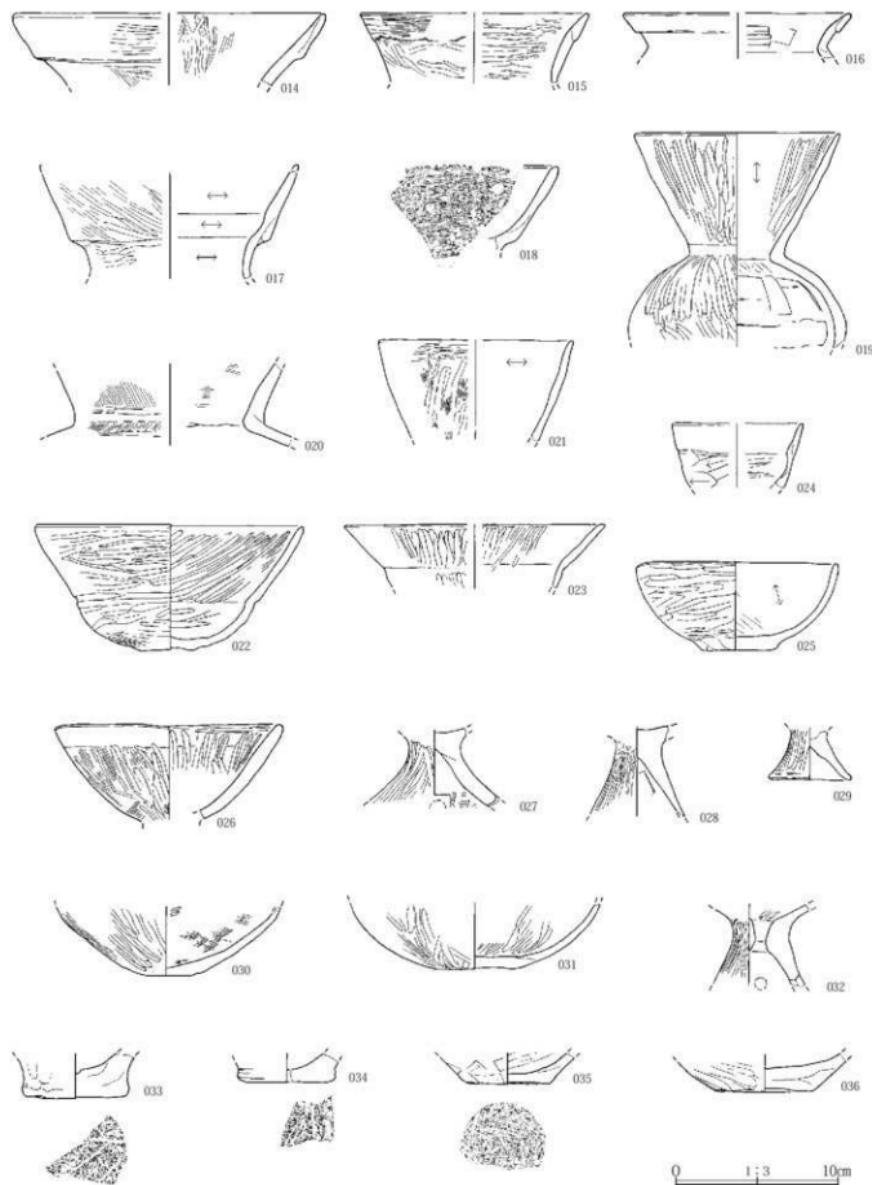
図に掲げた遺物集中地点以外は、個別に散在分布しており、遺構との関連をうかがわせるものはない。第17～19図に59点を掲載し観察表に詳細を記した。未掲載数は1565点で、器種内訳は壺・甌類1394点、壺・鉢類112点、高杯49点、器台10点である。未掲載はほかに樽式土器片9点と近世瓦片1点がある。第20図の鉄器片は墳丘下黒褐色土層出土で、長方形断面の細板形状から鑿か鉗の一部と思われる。



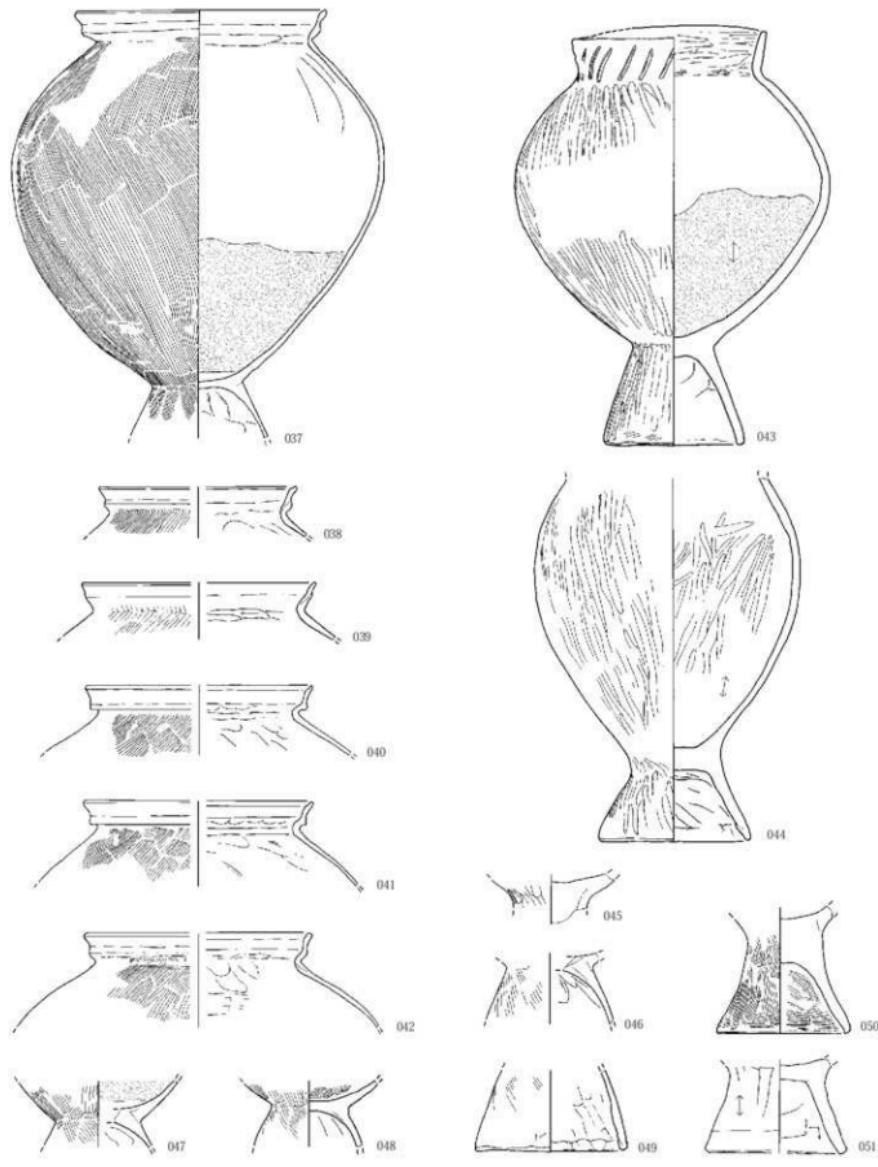
第15図 出土遺物(1)縄文土器



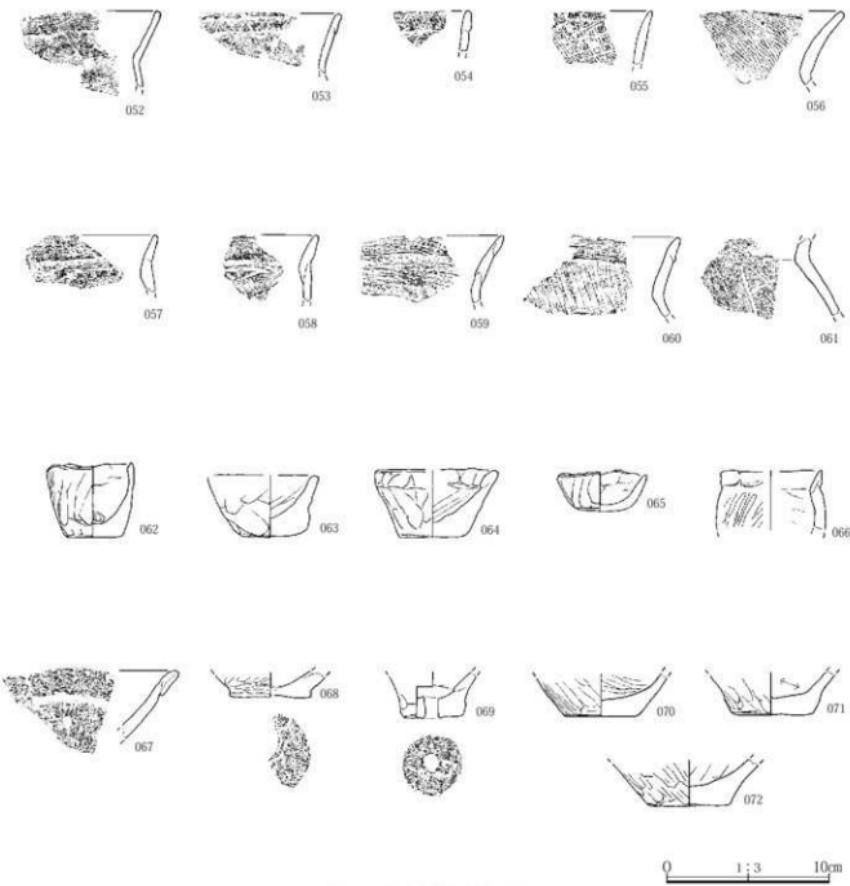
第16図 出土遺物(2)石器



第17図 出土遺物(3)土師器

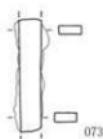


第18図 出土遺物(4)土師器



第19図 出土遺物(5)土師器

0 1 : 3 10cm



第20図 出土遺物(6)鉄器

0 1 : 2 1cm

3. 遺物観察表 出土位置「III」は「埴丘盛土」の略

拂 国 PL.No.	種 類 器 種	出士位置 残 存 率	計測値	胎上/焼成/色調	文 様 の 特 徴	備 考
第158 PL.9	001 縄文土器 深鉢	腹下部 脚部破片		粗砂、輝石/赤褐色/良好	横位。波状の多条沈線を多段に重ねる。 諸磯式	
第158 PL.9	002 縄文土器 深鉢	腹下部 口縁部破片		粗砂、白色粒、輝石/浅黃褐色 良好	改線をめぐらして幅狭な口縁部無文帯を区画、懸垂文を施し、虹を縦位充填施文する。 加曾利E3式	
第158 PL.9	003 縄文土器 深鉢	腹上部 脚部破片		粗砂/橙/ふつう	地文にLRを充填施文し、低隆帶を弧状に貼付する。	加曾利E3式
第158 PL.9	004 縄文土器 深鉢	一括 口縁部破片		粗砂/橙/良好	隆線をめぐらして口縁部無文帯を区画、隆線に虹を縦位充填施文する。	加曾利E4式
第158 PL.9	005 縄文土器 深鉢	腹下部 口縁部破片		粗砂、輝石/にぶい橙/良好	波状口縁、隆線をめぐらして口縁部無文帯を区画、沈線による弧状モチーフを施し、LRを充填施文する。	加曾利E4式
第158 PL.9	006 縄文土器 深鉢	腹上部 脚部破片		粗砂、白色粒/浅黄/良好	改線による弧状モチーフを施し、LRを充填施文する。	加曾利E4式
第158 PL.9	007 縄文土器 深鉢	腹上部 脚部破片		織砂/にぶい黄褐色/ふつう	蛇行条線を垂下させる。	加曾利E4式
第158 PL.9	008 縄文土器 内耳直	腹上部 脚部破片		粗砂、白色粒/にぶい黄褐色/ふ つう	改線をめぐらして口縁部無文帯を区画、隆線にLRを縦位充填施文する。	加曾利E4式
第158 PL.9	009 縄文土器 内耳直	腹下部 脚部破片		粗砂/浅黄褐色/ふつう	改線を伴う弧状把手を削付。LRを充填施文する。	加曾利E4式
第158 PL.9	010 縄文土器 深鉢	腹下部 口縁部破片		粗砂、白色粒/にぶい/ふ つう	2本沈線を基調とし、垂下させて縦位区画、区画内に横位、横位強状に施す。	堀之内I式
第158 PL.9	011 縄文土器 深鉢	腹上部 脚部破片			010と同一個体。	堀之内I式
拂 国 PL.No.	種 類 器 種	出士位置 残 存 率	計測値(cm.g)	石材・素材等	形狀・成形・整形の特徴	備 考
第168 PL.9	012 石器	腹下部	長 幅 (2.1) 1.7 厚 重 1.1	黒色頁岩	円基有茎端。全面を押圧削離が覆う。先端部は卓まり気味で、側縁は断面形状を呈す。先端部には衝撃削離痕が残る。	
第168 PL.9	013 削器	腹下部	長 幅 4.7 3.9 厚 重 1.5 30.4	灰色安山岩	背面側平坦削離面や上端側削離面の枝線にも摩耗痕がある。打製石斧の脚部破片を素材に用い、削器としたもの。	
拂 国 PL.No.	種 類 器 種	出士位置 残 存 率	計測値(cm)	器形・文様の特徴 /胎上/色調	成形・整形の特徴	備 考
第178 PL.9	014 土師器 壺	盛上部 口縁部	口 (19.0)	幅広の粘土帶付で有段口縁、/安山岩系粗砂に白岩片多く含む/明赤褐色	内外面ナデ後横ミガキ。頭部は斜位ハケメ後転し横ミガキ。	
第178 PL.9	015 土師器 壺	盛上下 口縁部	口 (14.0)	口縁は幅広の折返し、/安山岩系粗砂主体に白岩片多く含む/明赤褐色	外面はハケメ後、横ミガキ。内面は横ミガキ。	
第178 PL.9	016 土師器 壺	盛上部 口縁部	口 (13.8)	折返口縁、/安山岩系粗砂主体/橙	外面ナデ。内面は板小口による横位ナデ。	
第178 PL.9	017 土師器 壺	盛上下 口縁部		有段口縁、/安山岩系粗砂主体/橙	外面ナデ後斜位ミガキ。頭部は横ミガキ。内面は全体に横ミガキ。	
第178 PL.9	018 土師器 壺	盛上下 口縁部		有段口縁で口唇に外傾面、/安山岩系粗砂に白岩片多く含む/にぶい黄褐色	外面横ハケメ後、内外面とも横位ミガキ。	
第178 PL.10	019 土師器 直口壺	土器集中出土地 点、盛上下 口縁～体部上半 2/3	口 12.4	体部は偏球形、/安山岩系粗砂に白岩片多く含む/赤褐色	頭部に横ナデ。口縁の内外面と体部外面上には裏ミニガキ。体部内面は横横ナデ。頭部内面に指オサエ痕、体部内面に粘土帶痕上げ痕を残す。	口縫内一面に黒斑、外面部に煤付着。
第178 PL.10	020 土師器 壺	盛上下 頭部		強いくの字状屈曲、/安山岩系粗砂主体/にぶい黄褐色	外縫は整った斜ハケメ後、頭部に横ナデ。口辺内面はハケメ、肩部内面は指オサエ痕ナデ。	
第178 PL.10	021 土師器 附か直口壺	盛上下 口縁部	口 (11.8)	内外面赤褐色、口縁は内側骨突、 /安山岩系粗砂主体/にぶい赤褐色	口縫外縫と内面全体は横ミガキ。外縫はハケメ後縦ミガキ。	
第178 PL.10	022 土師器 壺	土器集中出土地 点、盛上下 口縁～体部上半 2/3	口 16.3 底 3.0 高 7.7	浅く大きく開き、底部は小さなぼみ底/安山岩系粗砂主体/赤褐色	外縫の頭部に笠先で強い凹窓をめぐらす。外縫は横。内面は斜位ミガキ。	
第178 PL.10	023 土師器 附か杯	黑色土、盛上下 口縁部	口 (15.6)	口縁上面に平坦面、/安山岩系 織砂主体/灰黃褐色	内外面とも縦位ミガキ。	
第178 PL.10	024 土師器 壺	盛上部 口縁～体部	口 (7.8)	白岩片、赤粒の織砂/明褐 褐色	口縫はナデ。頭部外面に沈線状ミガキをめぐらす。体部外縫はケズリ。体部内面はナデ後斜位ミガキ。	
第178 PL.10	025 土師器 鉢	黒色土、盛上下 口縁～部欠 高 5.5	口 12.1 底 4.5	半球形で突出した底平、/安山 岩系粗砂に白岩片多く含む/明赤褐色	外縫は横ミガキ。内面は斜～縦位ミガキ。底部はケズリ後ナデ。	
第178 PL.10	026 土師器 高杯	盛上下 口縁～杯部2/3	口 13.7	安山岩系粗砂主体/にぶい赤褐色	口縫横ナデ。杯部外縫はハケメ後縦ミガキ。杯部内面は縦ミガキ。	脚結合痕をわずかに残す。

第4章 検出された遺構と遺物

掃 図 PL.No.	No.	種 類	出土位置 残存 有	径計測値(cm)	器形・文様の特徴 /胎土/色調	成 形・整 形 の 特 徴	備 考	
第178回 PL.10	027	土師器 高杯	盛上下 脚部上半片		脚中央に4力所穿孔/安山岩系粗砂に白岩片多く含む/明赤褐色	外面は縦ミガキ、内面は横ハケメ後ナデ。		
第178回 PL.10	028	土師器 高杯	黒色土 脚部上半片		縞砂を少量含む精良素地/に ぶい黄褐	外面は縦ミガキ、内面は覽ナデ。杯部底 面はミガキ。	器内は還元色。搬入品か。	
第178回 PL.10	029	土師器 ミニチュア 高杯	盛上土部 脚部	脚 4.7	安山岩系細砂主体/橙	外面は縦ミガキ、内面はナデ。杯部結合 は粘土充填による。		
第178回 PL.10	030	土師器 昭か直1直	土器集中出土地 点 脚部下半~底部	底 2.5	偏球形で底部は丸みのある小 平底。(白安山岩粗縞多々)に ぶい赤褐色	外面はケズり後ナデと縦底ミガキ。内面 は浅い横位ハケメ。	019と同一の可能 性あり。	
第178回 PL.10	031	土師器 壺	盛上下 脚部下半~底部	底 4.8	小さな平底/安山岩系粗砂主 体/灰黃褐	内外面とも縦主体のミガキ。	外面一部に黒斑。	
第178回 PL.10	032	土師器 器台	盛上下 脚部上半片	孔 径 0.7	脚中央に4力所穿孔/安山岩 系粗砂主体/赤褐色	外面は縦ミガキ、内面はナデ。器部底 面にミガキ。穿孔は上下方向からの鋸先 ナデ。		
第178回 PL.10	033	土師器 壺	盛上下 底部	底(6.6)	底面上に木葉痕/安山岩系粗 砂主体/にぶい黃褐色	外面は軽い覽ナデ。内面はナデ。		
第178回 PL.10	034	土師器 壺	盛上下 底部	底(6.0)	底面上に木葉痕/安山岩系粗 砂主体/にぶい黃褐色	外面は軽い覽ナデ。内面はナデ。		
第178回 PL.10	035	土師器 壺	盛上下 底部	底 5.2	赤粒粗砂が多い/にぶい赤褐色	内外面、底面共に抜ケズリ。		
第178回 PL.10	036	土師器 壺	盛上下 底部	底 6.0	浅く窪み底/羽片等の細縞が 多い/灰黃褐	外面は軽いミガキ、内面ナデ。		
第188回 PL.10	037	土師器 S字甕	土器集中出土地 点、盛上下 口部~体の一 部、脚部下半欠	口 15.2		口縁やや丸く肥厚。体部中位 が張る。/にぶい黄褐色	口縞横ナデ。体部外面に斜位ケズリの後。 3段前後の左上がりハケメ、頭~肩部に 2段の左下がりハケメ。脚部外面に右下が りハケメ。ハケメの順は体部~頭~脚部 で、時計回りに施す。頭~体部及び脚部 の内面は指頭押圧の凹みを残してナデ。	外側体部上~下位 に煤、内側体部下 半に水平のコゲ 痕。
第188回	038	土師器 S字甕	盛上下 口~肩部片	口 (12.0)	口内面に凹線がめぐる/安 山岩系粗砂に片岩粒をわずか に含む/灰褐色	口縞横ナデ。頭~肩部に左下がりのハケ メを時計回りに施す。頭部~肩部内面は 指頭押圧の凹みを残すナデ。	小型品。	
第188回	039	土師器 S字甕	盛上土部 口~肩部片	口 (14.2)	口縞屈曲が強い/安山岩系粗 砂主体/にぶい黄褐色	口縞横ナデ。頭~肩部に左下がりのハケ メ、頭部~口縞下半に上へのハケメ。頸 部内面にケズリ。	頭部外面に煤残 す。	
第188回	040	土師器 S字甕	盛上下 口~肩部片	口 (13.8)	口縞めて薄く、口縞内面に 凹線がめぐる/安山岩系粗砂 に赤粒粗砂含む/にぶい黄褐色	口縞横ナデ。頭~肩部に斜位ケズリの後。 左下がりのハケメ、頭~肩部内面に指頭 押圧を残すナデ。	器内は還元色。	
第188回	041	土師器 S字甕	盛上下 口~肩部片	口 (13.9)	口縞めて薄く、口縞内面に 凹線がめぐる/安山岩系粗砂 に赤粒粗砂含む/にぶい黄褐色	口縞横ナデ。外面の頭~肩部に2段の左下 がりハケメ。体部は左上がりハケメ。ハケ メの順は体部~頭~肩部で、時計回りに 施す。頭~肩部内面は指頭押圧の凹みを 残してナデ。	040と同一個体の 可能性あり。	
第188回	042	土師器 S字甕	盛上下 口~肩部片	口 (13.6)	口縞めて薄く、口縞内面に 平坦面をつくる/安山岩系粗 砂に細縞含む/にぶい黄褐色	口縞横ナデ。外面の頭~肩部に2段の左下 がりハケメ。ハケメの順は体部~頭~肩部で、 時計回りに施す。頭~肩部内面は指頭 押圧を残すナデ。	口縞と肩部外面に 煤残す。	
第188回 PL.10	043	土師器 台付甕	土器集中出土地 点、盛上下 口部~体的一部 高	口 12.2 脚 8.3 高 25.7	直立する口縞の外面に、ヘラ 先による斜行沈線をめぐら す。体部は球形。/白岩片の粗 い脚立つ/赤褐色	外面は斜ハケメ後、縦底ミガキ。内面は ハケメ後、口縞は横線。体部は縦横のミガ キ。脚部内面はナデ。	体部内面下半には ぼ水平コゲ痕。体 部外面中~下位に 煤付着。	
第188回 PL.11	044	土師器 台付甕	土器集中出土地 点、盛上下 口縞、体部2/3 欠	脚 9.0	倒側卵形の体部。脚部は低い台 形で底部内面を折り返す/安 山岩系粗砂に白岩片多く含む /にぶい赤褐色	内面とも縦底ミガキ。ミガキ前の凹 面形にケズりらしき痕跡残す。脚内面は ナデ。	内面に不明瞭なコ ゲ痕。体部外面上 位の一部に保付 着。	
第188回	045	土師器 台付甕	盛上下部 脚部結合部		安山岩系粗砂主体/暗褐色	体部と脚部に、孔への粘土充填で結合す る。外面は縦ミガキ。底内面は砂目粘土を 張り付けてナデ。		
第188回	046	土師器 S字甕	盛上下 脚部上半片		安山岩系粗砂主体/にぶい黄 褐色	脚外側に右下がりハケメ。底部内面と脚 内面天井部に砂目粘土張り付けたナデ。		
第188回	047	土師器 S字甕	盛上下 脚結合部		安山岩系粗砂に長石、片 岩の粗縞含む/にぶい黄褐色	体部外面に上方ハケメ。脚部は右下がり ハケメ。底部内面に環状のハケメを施す。 脚内面天井部に補強のため粘土貼り付け てナデ。	体部内面下端に水 平のコゲ痕。	
第188回	048	土師器 S字甕	盛上下 脚結合部		安山岩系粗砂に赤粒粗砂含 む/にぶい黄褐色	外面に右下がりハケメ。内面は指頭压 痕を残すナデ。		
第188回	049	土師器 S字甕	盛上下、上部 脚下半3/4	脚 9.1	脚部は内面折返しで厚壁/粗 砂主体/にぶい黄褐色	全体に被熱、やや 赤変。		
第188回 PL.11	050	土師器 台付甕	盛上下、上部 脚部	脚 7.9	結合部は円柱状/安山岩系粗 砂主体/にぶい黄褐色	外面は縦、内面は斜位ハケメ。脚部は内 外面とも横ハケメ。		

3. 遺物観察表

種 因 PL.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値(cm)	器形・文様の特徴 /胎土/色調	成 形・整 形 の 特 徴	備 考	
第1984 PL.051	051	上師器 台付甕	試掘トレンチ 脚部1/2		脚(8.1) 低い台形状。/安山岩系粗砂に 白岩片多く含む/橙	内面天井部に粘土補填でなでつけ、外面 はケズり後粗いミガキ。内面は横位籠ナ 子。		
第1984 PL.052	052	上師器 甕	盛上下 口縁片		口縁やや肥厚。口縁外面に、 説教文具先端による斜格子文を描く。/安山岩系粗砂主 体アチャート彫籠含む/にぶ い赤褐	整形は内外面ともハケメ。		
第1984 PL.11	053	上師器 甕	盛上下 口縁片		口縁やや肥厚。口縁外面に、 説教文具先端による斜格子文を描く。/安山岩系粗砂主 体アチャート彫籠含む/にぶ い赤褐	整形は外面がナデ、内面は横ミガキ。		
第1984 PL.11	054	上師器 甕	盛上上部 口縁片		口縁やや肥厚。口縁外面に、 説教文具先端による斜格子文を描く。/安山岩系粗砂に 白岩片多く含む/橙	整形は外面がナデ、内面はハケメ後粗い ミガキ。		
第1984 PL.11	055	上師器 甕	盛上下 口縁片		口縁外面に説教文具先端による斜格子文を描く。右下へ左下の順。 /白岩片が多い/明赤褐	外表面はハケメ、内面はハケメ後横ミガキ。		
第1984 PL.056	056	上師器 甕	盛上下 口縁片		口縁は内傾する面をなす。/安 山岩系粗砂に雲母粒含む/にぶ い黄褐			
第1984 PL.057	057	上師器 甕	盛上下 口縁片		口縁は折返し肥厚。頸部は弱 いの字状屈曲。/安山岩系粗砂 に白岩片多く含む/黒褐	外表面は横位の籠ナデ。内面は粗いミガ キ。		
第1984 PL.058	058	上師器 甕	盛上下 口縁片		口縁は肥厚。頸部は洗練状の 段。/安山岩系粗砂に白岩片多 く含む/黒	外表面は、口縁へ頸部が選るナデ。体部ケ ツリ。内面は口縁が粗いミガキ、体部が ハケメ。	057と同一個体の 可能性。	
第1984 PL.059	059	上師器 甕	盛上下 口縁片		口縁は肥厚。/安山岩系粗砂主 体/黒褐	内外面とも粗い横ミガキ。		
第1984 PL.11	060	上師器 甕	盛上上部 口縁片		口縁やや肥厚する折返し。頸 部はくの字状屈曲。/安山岩系 粗砂に白岩片多く含む/にぶ い赤褐	外表面の口縁肥厚部は横、頸部は縦位のハ ケメ。内面は横ハケメ後粗いミガキ。	外表面に横付着。	
第1984 PL.061	061	上師器 直か甕	盛上下 脚部		強いくの字状屈曲。/安山岩系 粗砂主体/赤褐	外表面はハケメ後粗いミガキ。内面は口縁 が横ハケメ、体部が横ケズリ。	外表面に横付着。	
第1984 PL.11	062	上師器 手捏ね	北内盛上下 完形	口 5.1 高 4.9	底 3.4 深鉢形。/安山岩系粗砂主体/ 脚	内外面とも底による粗いナデと指押さ え。		
第1984 PL.11	063	上師器 手捏ね	北端盛土下 高大部分欠	口 (5.4) 高 3.8	底 3.6 深鉢形。/安山岩系粗砂に白岩片 多く含む/明赤褐	内外面とも指オサエとナデ。		
第1984 PL.11	064	上師器 手捏ね	北端盛土下 体部3/4欠	口 (7.2) 高 4.1	底 3.9 深鉢形。/安山岩系粗砂に白岩片 多く含む/灰黃褐	口縁は内面に折返し痕を残し肥厚。内外 面とも指オサエとナデ。		
第1984 PL.11	065	上師器 手捏ね	盛上下 口縁一部欠	口 5.3 高 2.5	底 3.1 片多く含む/明	外表面とも指オサエとナデ。		
第1984 PL.066	066	上師器 手捏ね	盛上下 口縁一体部上半 片	口 (6.0)	捷形。/安山岩系粗砂に白岩片 多く含む/赤褐	口縁は折返し、肥厚。体部外表面は縦ミガ キ、内面はナデ。		
第1984 PL.11	067	上師器 直か有孔鉢	盛上上部 口縁一体部片		折返し口縁で、内面に横合痕 残す。/安山岩系粗砂主体/にぶ い黒	体部外表面に横ハケメ後、内外面ともナデ。	器形歪みあり。	
第1984 PL.068	068	上師器 有孔鉢	盛上下 底部4/3		底 孔 径 (5.0) (1.6)	偏って口孔。/安山岩系粗砂に 白岩片多く含む/明赤褐	内外面ともミガキ。	
第1984 PL.11	069	上師器 有孔鉢	土器集中出土地 点 武部町		底 孔 径 3.6 0.97	突出底。中央1孔。/安山岩 系粗砂に白岩片多く含む/橙	内外面ともナデ。	
第1984 PL.070	070	上師器 甕	盛上下 底部片		底 4.6	/岩片等の耀輝が多い/明赤褐	ケズリ後内外面及び底面にミガキ。	外表面被熱色変。
第1984 PL.071	071	上師器 甕	盛上下 底部片		底 5.3	/安山岩系粗砂に耀輝多い/褐	内外面とも斜へ横位ミガキ。	
第1984 PL.072	072	上師器 甕	盛上下 底部片		底 5.2	/岩片等の耀輝が多い/黒褐	内外面とも竪状具による粗いナデ。	

種 因 PL.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値(cm,g)	胎土/純成色/調 石材・素材等	成 形・整 形 の 特 徴	備 考
第30回 PL.11	073	鉄製品 不明	脚下部 両端部欠損	長 (4.6) 幅 0.8 厚 5.5	重	刀子の茎にも見えるが、幅が変化しない ためはっきりとしない。植鈎の持ち手部 分にも見えるが、詳細不明。	

第5章 総括

1 方形周溝墓について

本遺跡で検出された方形周溝墓1基は、判明したのが北半の墳丘部であり、全形、周溝、埋葬部については確認できていない。確実なのは、面の整った方形墳丘を築成し、中央部を盛土、周縁は地山を削って墳丘法面を造り出した工法である。

平面形については、正方形か長方形のどちらかが想定されるが、決め手となる根拠は得られていない。調査区内で検出された墳丘の東面と北面は、各々南南東と西北西の未調査区に延長する形状であり、コーナー部の存在を推測させるような墳丘面の変化は見られなかった。仮に調査区外の最短地点に東西南の各コーナー部を想定した場合の墳丘復元平面形と規模を示したのが第21図である。墳丘上位の削平面端部(標高209.20m前後)と、北辺と東辺の墳裾ラインとの距離関係をもとに、左右対称形を前提に復元を試みた。ちなみに第12図の断面Aでみられる東辺の削平面端一墳裾の水平距離は約6m、断面Bの北辺では約4.5mである。最小規模の長方形プランは長軸22m前後、短軸15~16mと推測される。同様に正方形プランを想定すれば一辺22m前後になる。この数値はあくまで墳丘規模であり、周溝を含めた古地規模ではないことを断っておく。周溝は北辺に比べて東辺では、幅が狭く浅い。また、北辺は勾配の強い逆台形断面部の深さが0.5mほどで、近隣の類例と比べても浅い。調査では内側法面の検出のみで、調査区外で深い本来の底面が確認される可能性を想定しておく。

墳丘断面形については、整った平面を法面とする低台形で、削平されていた墳頂部は丸みをもつかそのまま台形状になると思われる。注目されるのは墳丘の高さである。第12図の土層断面観察によれば、旧表土に土盛りされた高さは1m前後と推定される。一方、地山部分は約1mを削平して法面を造り出しており、さらに周溝を0.5mほど掘り込む。従って、周溝底から墳頂部までは2.5mほどの比高であるが、旧地表上とは1m程度の高さなので、墓周辺に居る身長1.5mの人物の目線よりは下に

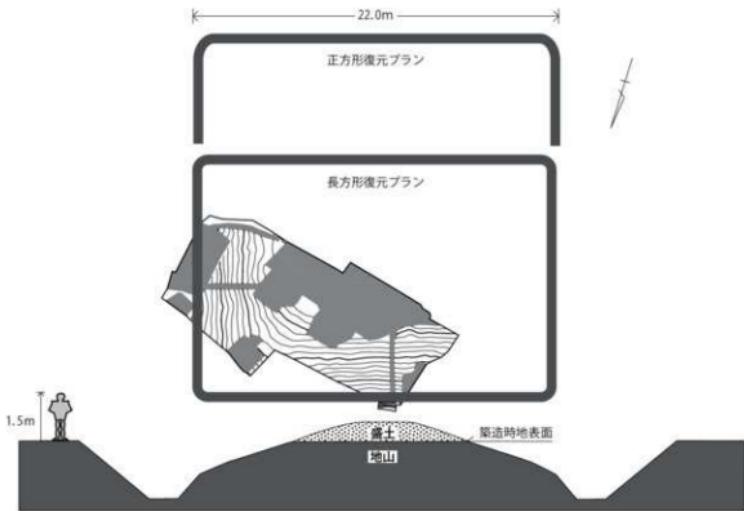
なる(第21図)。のことから、本遺跡の方形周溝墓の墳丘景観は、溝で囲まれた「半地下式墳丘墓」というべきであろう。周溝を含めれば一辺30m近い面積規模を占めるにもかかわらず、「高塚」イメージではなく「溝区画」を優先している点に、古墳との質的な差が生じると理解しておきたい。

埋葬施設については、中心位置に削平と後世擾乱が及んでいたため確認できなかったが、正方形プランであれば、墳丘中央は南側調査区外約3m前後の位置になる。ちなみに、他遺跡例を参考に埋葬施設は木棺直葬の土坑と想定される。

方形周溝墓の築造年代については、古墳時代中期の5世紀代と考えたい。6世紀初頭前後のH-II-FA堆積時点での墳丘面には流下堆積した表層が形成され、周溝は0.5m近くの深さで埋設していた。のことから、下限は5世紀後葉とすることができる。一方の上限については、墳丘盛土下の旧地表層から出土した古墳前期の土器群が決め手になる。これについての検討は次節で述べるが、概ね4世紀中後半代と考えている。墳丘盛土は古墳前期土器群が埋もれた地表面上に見られるので、盛土時期は4世紀中葉を廻ることは無いだろう。このように推定年代幅を考えたうえで、土層堆積状況からあえて絞り込むとすれば、5世紀前半代の可能性が高いと考える。検討の余地があるとすれば、後掲する「テフラ分析」で、盛土直下の薄層に含まれていた有馬火山灰の降下年代との整合性だろう。

2 古墳時代前期土器について

本遺跡の方形周溝墓墳丘下に堆積する黒褐色土中から出土した土器群は、器種組成、および各器種に見られる型式的特徴から、布留式の新しい段階に近似する。特に小型丸底壺・直口壺・高杯の形状に相似する特徴がみられる。また、S字状口縁台付壺は肥厚し間延びした口縁と長胴化以前の体部形状、肩部への横横ハケメを失った特徴から、田口分類IV b類(田口1981)に相当する。これらの土器様相について、古墳時代前期の土器編年を整



第21図 方形周溝墓の推定復元図 平面 1:300、断面高は 1:150

理した深澤編年(深澤2011)に従えば、前期新段階に位置づけられよう。本遺跡の古墳前期土器群は、北側に隣接展開する中郷恵久保遺跡の集落出土土器群と同一様相を示している(群埋文2006)。ここでは本遺跡で希薄だった高杯のほか器台や小型丸底壺・鉢類の小型器種の様相が明瞭である。この中で新しい型式的特徴として、高杯では布留式の影響を受けた長脚及び屈折脚が見られ、小型丸底壺では器高の低い杯タイプが現れている。このことからも布留式新段階に並行する時期があったと考えられる。一方、壺や甕及び鉢類に在地後期弥生土器である樽式の系譜を引くものが少なからずみられる。豊穴一括出土資料によれば、これらは新旧時間差ではなく、同一存在の可能性が高い。当該遺跡では時期判定可能な土器を出土する豊穴建物が23棟以上検出され、明らかな重複は見られないものの併存不能なほど壁を接する例が5カ所ほどみられ、少なくとも豊穴建物の建て替え2段階の時間幅を見込んでおく必要がある(第2図)。その時間幅のなかでも、樽式土器の系譜が、布留式中～新段階の時期まで残存することは明らかである。ただしこの様相が群馬県北部という地域性に基づくものか否かは改めて検討することとしたい。

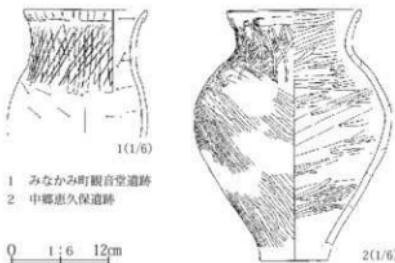
ところで、中郷恵久保遺跡出土土器群の中に、口縁部に沈線による斜格子文を描く甕が特徴的に見られる。当該遺跡の報文で「斜格子目文甕形土器」と命名されたこの類は、本遺跡でも数点みられた(第19図052～055)。これらは、北毛地域の沼田～渋川～吾妻地域に分布する樽式土器「沼田型甕」の一類型であることが知られている(大木2019)。第22図には比較資料として、みなかみ町観音堂遺跡例の「沼田型甕」、中郷恵久保遺跡出土「斜格子目文甕」を掲げた。観音堂例は樽式3期新段階に位置づけられ(大木2020)、中郷恵久保例は古式土器の共鳴現象というべき器形の変化を遂げた段階のものである。このことは、弥生後期に誕生した樽式土器の地域性を維持したまま古墳前期土器に継承されたことを示す。文様はやや異なるが、本遺跡出土の台付甕(第18図043)は口縁に斜行する笠描き沈線を描いており、沈線斜格子文の変形と考える。器形は樽式の台付甕と異なり、むしろ南関東地方の單口縁台付甕に近似する。あるいは、共伴するS字状口縁台付甕の器形から影響を受けた可能性も考え得る。特筆すべきは体部全体がミガキ手法で仕上げていることである。口縁欠損で全形は不明だが、第18図044の台付甕も内外面をミガキで仕上げる。同様な例は

中郷恵久保遺跡でも複数例みられる。これらは器形こそ外來系の台付甕（S字縹及び單口縹）に類似するが、ハケメ整形でなくミガキ仕上げとする共通点が重要である。この手法は樽式土器の甕に通有の基本的特徴として知られる。換言するならば、これらの甕は樽式土器の製作手法で製作された外來系台付甕の模倣と捉え得よう。紙幅の関係から詳述することは避けるが、様式概念を重視した「樽式系」（若狭1990）理解とは別に、個別土器型式レベルにおいて、古墳時代前期の後半段階まで樽式の伝統が継承されていることに注目しておきたい。象徴的文様ともいえる櫛描文構成を失った段階で樽式土器の消滅と筆者は考えるが、古墳時代土師器への転換の中で、土器製作手法に脈々と樽式土器の伝統がみられることは、その想い手として在地弥生人の後裔が少なからず関与していたことを示すものだろう。

3 周辺遺跡との関係について

吹屋恵久保遺跡で検出された方形周溝墓を造営した集団について、北側に隣接する中郷恵久保遺跡（国道353号部分調査）の古墳時代前期集落が候補と考えられたが、前項における築造年代の相違から否定せざるを得ない。築造推定年代の5世紀前半に相当する遺跡としては、西方に400m離れた中郷田尻遺跡・吹屋糞屋遺跡が有力と考える。本遺跡とは鰐沢川の谷をはさんだ対岸微高地にあり、古墳時代中期5世紀代全般にわたる集落が展開している。この微高地は谷の右岸に沿って北西→南東に延びるので、同一微高地上の北西や南東部で墓域が形成された可能性も想定できるが、吹屋恵久保遺跡もその候補としておきたい。

本遺跡の方形周溝墓は、良好な埋没条件から墳丘が確認でき、「半地下水式墳丘墓」と呼称すべき形状を確認した。当地域における同類例としては、田尻遺跡・丸子山遺跡・押手遺跡・黒井峯遺跡が知られている。いずれも厚い榛名山火山噴出物フラで覆われていたために原形を保っていたものである。いずれも墳丘形態や盛土方法に共通性があり、大きな相違は規模だけであろう。本遺跡で推定された一辺22mの墳丘規模は、このなかで最大級である。4基が検出された黒井峯遺跡では「3号墳」とした1基だけが他よりも大きい。すでに古墳の形態や規模で明らかなヒエラルキーが看取される5世紀代の築造だ



第22図 斜格子文甕の類例

(いずれも報告書より転載)

けに、規模の大小だけが被葬者格差を反映したものとは考えにくい。副葬品を見ても、黒井峯や丸子山遺跡のように、僅かな玉類のみという点で共通する。規模よりはむしろ、高塚墳や積石塚といった「古墳」との相違が課題であろう。この場合も単に階層序列だけでなく、被葬者出自等も検討したうえで位置づけていく必要があろう。

参考・引用文献

- 大木神一郎2019『群馬県北部吾妻川流域の後期弥生遺跡について』『研究記要 37』群理文 pp.33-52
- 大木神一郎2020『群馬県における弥生時代後期の土器について』『研究記要 38』群理文 pp.31-50
- 群理文2006『中郷恵久保遺跡』
- 子持村教育委員会1985『黒井峯遺跡』
- 子持村教育委員会2005『田尻遺跡-第11地点-』
- 子持村教育委員会2005『丸子山遺跡』
- 田口一郎1981『S字状口縹台付甕の分類と編年』『元島名将軍塚古墳』pp.92-97
- 深澤敦仁(2011)『前期の上毛野-外來要素の受容と在地化-』『季刊考古学』第17号 pp.20-31
- 若狭 繁(1990)『群馬県における弥生土器の崩壊過程』『群馬考古学手帳』1 pp.11-32

付 篇

第2章でふれたように、吹屋恵久保遺跡の存する渋川市旧子持村域では、南西に聳える榛名山の噴火活動によって6世紀代の古墳社会は多大な災害を被っている。榛名山は5世紀代にも小規模な噴火活動が想定されている。また、長野県境の浅間山の度重なる噴火活動も、当地域の地形形成や人類社会に大きな影響を与えた。火山噴火に伴うテフラについては、降下堆積年代がある程度確定しており、人類の残した過去の遺跡の年代推定に有効であるのは言を俟たない。逆に遺跡でのテフラ堆積状況が堆積年代の絞り込みに貢献することもある。本遺跡で検出された方形周溝墓と、年代情報をもつテフラ堆積層との関係性は、築造年代推定のみならず、遺跡周辺地域の自然環境推定にも重要なデータを提供するため、渋川市教育委員会が火山灰考古学研究所に依頼したテフラ分析の提供を受けて掲載することとした。

火山灰分析について

火山灰考古学研究所 早田 勉

1. はじめに

北関東地方西部の利根川扇状地とその周辺には、榛名、赤城、浅間など、北関東地方とその周辺に分布する火山のほか、中部地方や中国地方、さらには九州地方など遠方の火山から噴出したテフラ(tephra、火山碎屑物あるいは火砕物のこと)が数多く降灰している。とくに、後期更新世以降に降灰したそれらの多くについては、噴出年代や岩石記載の特徴がテフラ・カタログ(たとえば町田・新井, 2011)などに掲載されており、考古遺跡でテフラに関する調査分析を行って、年代や層位が明らかな指標テフラを検出することで、遺物包含層や遺構の年代などに関する情報が得られるようになっている。

利根川扇状地の扇頂付近の河岸段丘面上に位置する渋川市吹屋恵久保遺跡の発掘調査においても、層位や年代が不明な遺構などが検出されたことから、野外調査(地質調査)を実施して、土層やテフラ層の層序記載ならびに高純度での分析試料の採取を行った。そして、実験室

内でテフラ分析(テフラ検出分析)を行って、指標テフラの検出同定を実施した。調査分析の対象地点は、搅乱部、方形周溝墓墳丘部、そして方形周溝墓周溝部の3地点である。

2. 調査地点の土層層序

(1) 搅乱部

搅乱部では本遺跡の土層の下部の基本的断面を観察できた(第23図1)。ここでは、下位より黄～橙褐色軽石混じり褐色土(層厚60cm以上、軽石の最大径38mm)、やや黄色がかかった灰色土(層厚13cm)、橙褐色スコリア質軽石混じり黒灰褐色土(13cm、軽石の最大径4mm)、灰褐色土(層厚4cm、墳丘部からの流れ込み)が認められた。

このうち、最下位の土層に含まれる黄色軽石には、やや泡巣が粗く斑晶が認められる粗粒のもの(最大径38mm、試料1)と、より色調が明るく斑晶がほとんど見られない中粒のもの(最大径17mm)がある。なお橙色軽石の最大径は14mmである。この堆積物には、黄灰色の軽石粗粒火山灰層が脈状に認められる。この堆積物については、層相から、おもに火山灰土からなる地すべり堆積物あるいは泥流堆積物と考えられる。ここでは、仮にこれを吹屋地すべり・泥流堆積物と呼ぶことにする。

その上位の土層中に含まれる橙褐色のスコリア質軽石の由来や年代は不明であるが、周辺遺跡では、弥生時代頃の土層中に認められることがあり、その詳細解明が待たれている。

(2) 方形周溝墓墳丘部

方形周溝墓墳丘部では、下位より黄色軽石混じり暗灰褐色土(層厚27cm以上、軽石の最大径6mm)、黒灰褐色土(層厚7cm)、白色軽石を少し含む黄褐色細粒軽石混じり黒灰色土(層厚17cm、軽石の最大径3mm)が認められた(第23図2)。このうち、最上位の土層からは4～5世紀頃の土器片が検出されている。

(3) 方形周溝墓周溝部

方形周溝墓の周溝覆土は、下位より黄色土ブロックが多く含む灰褐色土(層厚7cm)、黒灰色土ブロックや黄色

土ブロックを多く含む暗灰褐色土(層厚6 cm)、灰褐色土(層厚8 cm)、灰褐色土(層厚6 cm)、とくに暗い暗灰色泥質土(層厚7 cm)、暗灰褐色土(層厚5 cm)、暗灰褐色土(層厚11 cm)、成層したテフラ層(層厚6 cm)、暗灰褐色土(層厚5 cm)からなる(第23図3)。

このうち、成層したテフラ層は、下位よりアズキ色細粒火山灰層(層厚2 cm)、逆級化構造をもつ灰色粗粒火山灰層(層厚3 cm)、黄褐色細粒火山灰層(層厚1 cm)からなる。このテフラ層は、層相から6世紀初頭に榛名火山から噴出した榛名二ツ岳渋川テフラ(Hr-FA, 新井, 1979, 坂口, 1986, 早田, 1989, Soda, 1996, 町田・新井, 2011)に同定される。Soda(1996)の層区分に従えば、これら3層は、下位より順にS₁、S₇、S₉の可能性が指摘される。

3. テフラ分析(テフラ検出分析)

(1) 分析試料と分析方法

搅乱部で認められた粗粒の黄色軽石の由来解明、また方形周溝の埴丘下位の土層中のテフラ検出を目的に、6試料を対象として、テフラ粒子の量や特徴を定性的に把握するテフラ検出分析を行って、指標テフラの検出同定を実施した。分析の手順は次のとおりである。

- 1)粗粒の軽石について6 gを軽く粉碎。
- 2)土壤試料について試料10 gずつを電子天秤で秤量。
- 3)超音波洗浄装置により泥分を除去。
- 4)恒温乾燥器により80°Cで恒温乾燥。
- 5)実体顕微鏡下で観察。

(2) 分析結果

テフラ検出分析の結果を第2表に示す。搅乱部の軽石(試料1)は風化が進んでいるものの、無色透明のスponジ状あるいは纖維束状のガラス部がわずかに残存している。felsic鉱物の長石類が多く含まれており、磁鉄鉱など不透明鉱物以外の重鉱物(以下、重鉱物)には、斜方輝石や單斜輝石が認められる。

一方、方形周溝墓の埴丘部では、埴丘盛土直下の試料1に、よく発泡した灰白色の軽石やスponジ状軽石型ガラス、それにさほど発泡の良くない白色のスponジ状軽石型ガラスがや目立つ。重鉱物には、斜方輝石、單斜輝石、角閃石が含まれている。このような傾向は、試料2および試料3でも同様である。

このほか、最下位の試料6には、淡灰色の中間型や、灰色のスponジ状軽石型の火山ガラスが比較的多く含まれている。この試料では、重鉱物として、斜方輝石や單斜輝石のほかに、角閃石がわずかに認められる。

4. 考察

搅乱部で認められた吹屋地すべり・泥流堆積物中の粗粒の黄色軽石は、その岩相などから、約1.5~1.65万年前に浅間火山から噴出した浅間板鼻黄色軽石層(As-YP, 新井, 1962, 町田・新井, 2011)とそれに関係したテフラと考えられる。本遺跡の位置から、同時期の浅間火山北麓に広がった火碎流堆積物あるいは浅間草津軽石(As-K, 新井, 1979など)に由来する可能性が高い。脈状に認められる軽石粗粒火山灰層も、この一連のテフラに由来するもので、移動中に細粒テフラ層が変形を受けたと考えられる。

また、岩相から、この堆積物に含まれる明黄色の軽石は浅間白糸軽石(As-Sr, 町田ほか, 1984, 町田・新井, 1992など)、橙褐色軽石は浅間板鼻褐色軽石群(As-BP Group, 新井, 1962, 町田・新井, 1992, 早田, 2019など)に由来すると考えられる。以上のことから、吹屋地すべり・泥流堆積物はAs-YP降灰後に形成されたと推定される。

一方、方形周溝墓の埴丘の下位から検出されたテフラのうち、試料6に含まれる軽石質テフラは、その層位や岩相から、約5,400年前^{±1}の浅間六合軽石(As-Kn, 早田, 1991, 1996など)、あるいは約4,500年前^{±1}の浅間D軽石(As-D, 荒牧, 1968, 新井, 1979など)に由来する可能性がある。

さらに、試料1に含まれるテフラのうち、スponジ状に良く発泡した灰白色の軽石や軽石型ガラスは、岩相から、3世紀後半に浅間火山から噴出した浅間C軽石(As-C, 荒牧, 1968, 新井, 1979, 町田・新井, 1992, 坂口, 2010)と考えられる。また、さほど発泡の良くない白色のスponジ状軽石型ガラスや、角閃石の一部は、5世紀に榛名火山から噴出した榛名馬テフラ(Hr-AA, 町田ほか, 1984など)と考えられる。今後、テフラ粒子の屈折率測定などによる同定精度の向上が期待されるが、現段階では、発掘調査により検出された方形周溝墓の層位は、少なくともAs-CとHr-AAの間にあり、Hr-AAより上位の可能性が高いと考えられる。

5.まとめ

渋川市吹屋歴久保遺跡において地質調査を実施するとともに、テフラ分析(テフラ検出分析)を行った。その結果、吹屋地すべり・泥流堆積物(仮称)の上位に、浅間C軽石(As-C, 3世紀後半)、棟名有馬テフラ(Hr-AA, 5世紀)、棟名二ツ岳渋川テフラ(Hr-FA, 6世紀初頭)などを

文献

- 新井房夫(1962)関東盆地北西部地域の第四紀編年、群馬大学紀要自然科学編、10, p. 1~79.
 新井房夫(1979)関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層、考古学ジャーナル、no.53, p. 41~52.
 斎藤重雄(1968)浅間火山の地質、地図研専報、no.14, p. 1~45.
 町田洋・新井房夫(1992)「火山灰アトラス—日本列島とその周辺」、東京大学出版社、276p.
 町田洋・新井房夫(2011)「新編火山灰アトラス—日本列島とその周辺(第2刷)」、東京大学出版社、336p.
 町田洋・新井房夫・小田静夫・遠藤邦彦・杉原重夫(1984)テフラと日本考古学—考古学研究に關係するテフラのカタログ、古文化財編集委員会編「古文化財に関する保存科学と人文・自然科学」、p.865~928.
 坂口一(1986)棟名二ツ岳起源FA・IP層下の土師器と須恵器、群馬教育委員会編「荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡」、p.103~119.

認めることができた。発掘調査で検出された方形周溝墓の層位については、As-CとHr-FAの間で、Hr-AAより上位にある可能性が高い。

* 1 : 放射性炭素(¹⁴C)年代。

坂口一(2010)高崎市・中居町一丁目道路周辺集落の動向—中居町一丁目道路H22の水田耕作地と周辺集落との関係—、群馬県埋蔵文化財調査事業団編「中居町一丁目道路3」、p.17~22.

早田勉(1989)6世紀における棟名火山の2回の噴火とその災害、第四紀研究、27, p.297~312.

早田勉(1991)浅間火山の生い立ち、佐久考古通信、no.57, p.2~7.
 早田勉(1996)関東地方へ東北地方南部の示標テフラの諸特徴—とくに御岳第1テフラより上位のテフラについて—、名古屋大学加速器質量分析計業績報告書、no.7, p.256~267.

Soda,T.(1996)Explosive activities of Haruna Volcano and their impacts on human life in the sixth century A.D. Geogr. Rept., Tokyo Metropol. Univ., no.31, p.37~52.

早田勉(1919)北関東地方西部における莊石郡時代の火山噴火と環境変化、令和元年度岩宿フォーラム講演要旨集、p.19~25.

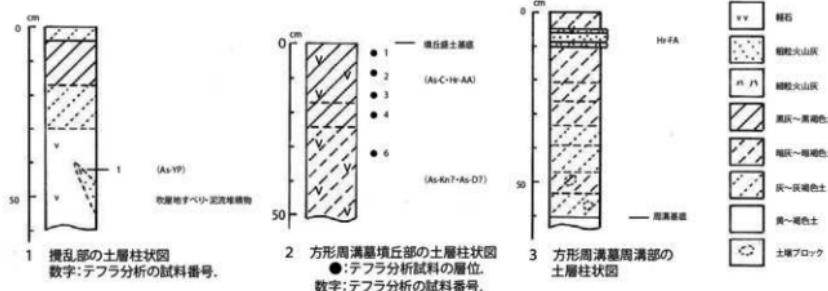
第2表 テフラ検出分析結果

地点	試料	軽石			火山ガラス			重鉱物 (不透明鉱物以外)
		量	色調	最大径	量	形態	色調	
塊丸部	1	(径38mm)軽石を粉碎	(＊)	pm(sp, fb)		無色透明		opx, cpx
方形周溝墓埴丘部	1	(＊)	灰白	2.1mm	*	pm(sp), nd	灰白, 白, 淡灰, 淡褐	opx, cpx, an
	2	(＊)	ad, pm(sp), sc		淡灰, 灰白, 白, 黒		opx, cpx, an	
	3	*	ad, pm(sp)		淡灰, 淡褐, 灰白		opx, cpx, (an)	
	4	*	ad, pm(sp)		淡灰, 灰		opx, cpx	
	5	**	ad, pm(sp), sc		淡灰, 灰, 黒		opx, cpx, (an)	

＊＊＊＊: とくに多い、＊＊＊: 多い、＊＊: 中程度、＊: 少ない、(＊): とくに少ない。最大径の単位: mm。

bp: バブル型、ad: 中間型、pm: 軽石型、sc: スコリア型。ol: カンラン石、opx: 斜方輝石、cpx: 単斜輝石、an: 角閃石、bi: 黒雲母。

重鉱物の(): 量が非常に少ないことを示す。



第23図 土層柱状図

吹屋恵久保遺跡火山灰分析写真図版

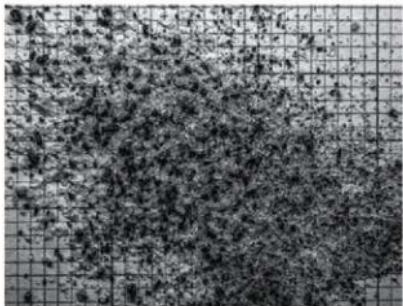


写真1 墓乱部・試料1(落射光)
長石類が多く含まれ、不透明鉱物以外の重鉱物には、斜方輝石や單斜輝石が認められる。背後は1mmメッシュ。

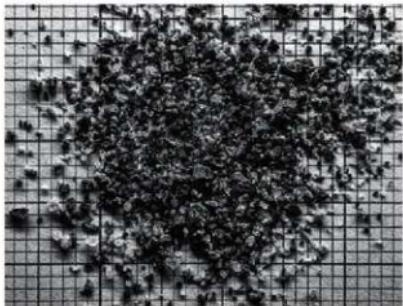


写真2 方形周溝墓埴丘部・試料1(落射光)
発泡の良い灰白色や、さほど発泡の良くない白色のスponジ状軽石型ガラスが少量含まれる。不透明鉱物以外の重鉱物には、斜方輝石や單斜輝石のほかに、角閃石が認められる。背後は1mmメッシュ。

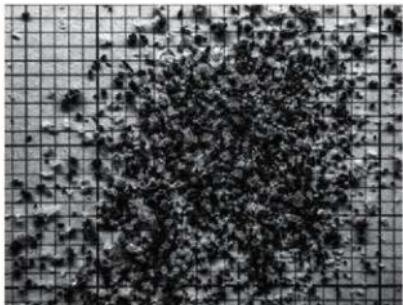


写真3 方形周溝墓埴丘部・試料6(落射光)
淡灰色の中間型ガラスや、比較的よく発泡した灰色のスponジ状軽石型ガラスなどが比較的多く含まれる。不透明鉱物以外の重鉱物では、斜方輝石や單斜輝石が目立つ。背後は1mmメッシュ。

図版 テフラ分析試料

写 真 図 版



1 吹屋恵久保遺跡調査区遠景(NW→) 遠方は利根川対岸の赤城山裾野(石井克己氏より提供) 矢印が調査地点



2 調査面の状況(SW→)



3 表土掘削状況



4 調査1面(Hr-FP上面)遺構確認作業



5 調査1面全景(E→)白色はHr-FP上面



6 調査2面(Hr-FP下面)全景(S→) 方形坑は現代建物基礎



7 Hr-FP直下面で判明した方形填丘(NE→)



8 Hr-FP直下面に残る多数の馬蹄痕(NE→)



9 馬蹄痕の確認作業



10 塗丘北側斜面に残る馬蹄痕



11 馬蹄痕検出状況(左は前脚部分)



12 橢円形くぼみに堆積するHr-FP



13 調査3面(Hr-FA下面)FA最下層のS₁を薄く残した状態



14 馬蹄痕群と思われる産み検出状況



15 馬蹄痕と推定される産み



16 馬蹄痕と推定される産み断面



17 Hr-FA断面 下からS₁、S₇、S₉



18 調査4面(填丘盛土面)全景(NE→) 背景は棲名山



19 填丘盛土面の検出作業(NE→)



20 塗丘中央の盛土断面(E→)



22 塗丘中央土層断面Dセクション 1m付近が旧地表面



23 塗丘中央の盛土断面Dセクション(W→)南へ傾斜



24 北辺中段の盛土断面Bセクション北半(NW→)



25 東辺塗掘断面Aセクション東部(SE→)



26 東辺周溝堆積土層断面Aセクション東端(S→)



27 調査5面(填丘構架面)全景(NE→)



28 填丘北辺の中段テラス部(NW→)



29 填丘北辺西半のテラス部(N→)



30 填丘東辺の溝状テラス部(N→)



31 填丘北辺テラス部の盛土(W→)



32 調査6面(墳丘下旧表土面)全景(E→)



33 墳丘中央盛土下の土器集中出土層位(W→)



34 墳丘中央盛土下の土器集中出土状態(E→)



35 旧地表土中鉢(025)出土状況



36 1号・2号土坑検出状況(W→)



001



002



003



004



005



006



007



008



009



010



011



012



013



019



022



025



026



028



029



032



037



043



報 告 書 抄 錄

書名ふりがな	ふきやいくぼいせき
書名	吹屋恵久保遺跡
副書名	渋川警察署吹屋交番新築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
卷次	
シリーズ名	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	692
編著者名	大木伸一郎 早田勉
編集機関	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行機関	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	20210721
作成法人ID	21005
郵便番号	377-8555
電話番号	0279-52-2511
住所	群馬県渋川市北橘町下箱田784番地2
遺跡名ふりがな	ふきやいくぼいせき
遺跡名	吹屋恵久保遺跡
所在地ふりがな	ぐんまけんしぶかわしふきや
遺跡所在地	群馬県渋川市吹屋660-67
市町村コード	10341
遺跡番号	K0077
北緯(世界測地系)	363113
東経(世界測地系)	139030
調査期間	20200701~20200731
調査面積	165.0m ²
調査原因	公共建物建設
種別	墓
主な時代	古墳
遺跡概要	墓-古墳-方形周溝墓1+土坑2/遺物包含層-縄文+古墳
特記事項	低墳丘を持つ方形周溝墓。榛名山噴火テフラで覆われて盛土墳丘が良好に遺存。
要約	5世紀前半代の墳丘部規模が一辺20mに及ぶ方形周溝墓を検出した。埋葬部は確認できなかった。造営集団の集落は西方に隣接する中郷田尻遺跡と考えられる。

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第692集

吹屋恵久保遺跡

群馬県警察署吹屋交番新築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

令和3(2021)年7月2日 印刷
令和3(2021)年7月21日 発行

編集・発行／公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

〒377-8555 群馬県渋川市北橘町下猪田784番地2

電話(0279)52-2511(代表)

ホームページアドレス <http://www.gunmaibun.org/>

印刷／朝日印刷工業株式会社

